

神は愛なり光なり  
《 神秘と救いの世界 - 霊界物語 》  
霊界物語 霊主体従  
子の巻（第一巻）

基本宣伝歌 ・ 発端





《 基本宣伝歌 》

9P

あきひて 朝日は照るとも曇るとも	つきみか 月は盈つとも虧くとも	だいちしづ たとへ大地は沈むとも	
まがつかみすき 曲津の神は荒ぶとも	まことちからよすく 誠の力は世を救ふ		(5)

さんぜんせかいうめはな 三千世界の梅の花	いちどひらかみのり 一度に開く神の教	ひらいてちみむすぶ 開いて散りて実を結ぶ	
つきひつちのくをしれ 月日と地の恩を知れ	このよをすくいきがみ この世を救ふ生神は	たかあまはらかむつど 高天原に神集ふ	(6)

かみおもてあら 神が表に現はれて	ぜんあくとたてわける 善と悪とを立別ける	このよをつくかむなほひ この世を造りし神直日	こころ 心
ひろおほなほひ も広き大直日	なほひみなほききなほ 直日に見直せ聞直せ	みあやまちの 身の過は宣り直せ	(7)

現代語訳

朝日が照り輝いても、又曇っても  
 月が満ちてきても、又欠けていっても  
 たとへ大地が沈むような事があっても  
 厄をもたらず曲津神が荒れ狂っても（どんなことが起こっても）  
 この世をお創造りになった神の力によってこの世界は救われる（五）

現界、幽界、神界の三界の梅（統一が）の花（初めて完成する）は  
 神の教によって一斉に開き  
 梅のように開いて散って実を結ぶ（苦勞の結晶の花が咲き匂ひ、うるはしき実を結ぶ神政の世を迎える）  
 月と太陽と大地の恩（恵み）をよく考えなさい  
 この世を救うのは眞の神であり、また人である  
 教えを実践する人々が高天原（綾部の大本）に集まってくる（六）

世に隠れてご守護下さっていた神がいよいよ表に現われて  
 身魂の善悪のけじめをハッキリとつけられる  
 この世をお造りになった大神の直霊によって  
 心を広くし吾人の直霊（省みる力）を働かし  
 我々の身の回りに起きる総てのことは  
 神から分け与えられた直霊の靈魂の働きによって見直し聞き直して省み  
 善言美詞を用いて自他の過ちもよい方向に受け取って言い直しなさい（七）

基本宣伝歌は国祖国常立命の御引退後、世が乱れ大洪水が迫り来る事を予言し、天教山の木花姫の御教えと、地教山の高照姫の垂訓を伝える宣伝使神が世人を覚醒させるために歌ったのがその始まりです。  
 大洪水の後伊邪那岐命、伊邪那美命が天地を造り固め給ひ、国生み、島生み、神生みによって一時は世も治まっていたが、第6巻によれば油の浸潤《しみ込んで広がる》するように悪が蔓延りここに三大教と五大教は生まれました。

\*黄金山の麓に、この混乱紛糾の世を救ふべく、埴安彦（女神）といふ神が現はれて、五大教といふ教を立てられ、その宣伝使である東彦と云ふ神人があった。【6/33】

\*一方、霊鷲山の麓の玉の井の郷に現れた三葉彦神(埴安姫)の教理を三大教と言い、天下に宣布するのが北光天使であつた。【6/34】

二人の宣伝使は川の畔で出会い互いにその教義を話合う。

「ここに東彦は、一たん黄金山の山麓の埴安彦神の御許に帰り、三大教の宣伝使である北光彦の言心行一致の神業を讃嘆《深く感心して褒める》しながら奏上し、かつ三大教の教義を詳細に語った。埴安彦神は之を聞いて大に感じ、直に使を霊鷲山に遣はし、三葉彦神を迎へ帰らせり」。そして互いに諒解を得て此処に三大教と五大教の両教を統一し、<sup>あなない</sup>三五教と改称し完成する。

歌は前半が五節、中間が六節、後半が七節で、五六七となっている。前半の五節は五大教の教義より、中間の六節は三大教の教義より、後半の七節は五大教と三大教を合わせたものです

一、

朝日は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くるとも たとへ大地は沈むとも  
曲津の神は荒ぶとも ①誠の力は世を救ふ

「朝日は照るとも曇るとも、月は盈つとも虧くるとも、たとへ大地は沈むとも」とはこの世に如何なる事態が起ころうとも、また「曲津の神は荒ぶとも」とは曲津神（邪神）によって人心が乱され、われよし、強いもの勝ちの世になっても、誠の力、<sup>こんこん</sup>埴良二神の御神力によって救われると云うことです。

#### ①『誠の力は世を救ふ』

邪神によってやむなく国祖国治立命《国常立命に同じ》と妻神豊国姫命の二柱は御引退になられます。その際、人々の罪汚れを一神に背負い、贖い主として根の国、底の国(地獄)に赴きます。しかし、大慈大悲の御心は、これから来る大洪水の惨害を知りながら去る事が出来ず、天教山(富士山)と地教山(ヒマヤラ)に一時身を隠し野立彦神、野立姫神と改名して陰から宣伝使神を世界に派遣し、大洪水が来る事を預言警告し、人々に善道に立ち返へるようみちびきます。大洪水の後伊邪那岐命、伊邪那美命二神が天之浮橋に立ち、島生み国生み、神生みの神業が始まったのを見定め、幽界(地獄)の罪人を天国に救うため天教山に身を投げ地獄に赴きます。

『誠の力は世を救ふ』とは第六卷第二十章「善悪不測」に以下のように示されています。

「至仁至愛至誠至実の身魂は、いかなる烈火の中も、その身魂を害ふこと無く、いかなる濁流に漂ふも、その身魂は汚れ溺ること無きは、全く『誠の力は世を救ふ』の宣伝歌の実証なり。その身魂の偉大にして無限の力あるときは、心中一切の混濁<sup>めいろう</sup>溟濛《くもって暗い》なる<sup>どんよく</sup>貪瞋痴の悪毒なければ、悪心ここに消滅して、烈火も亦清涼の風となるなり。【6/20 善悪不測】

《意味》これから起こるであろう天災地妖に対しても、また、邪神によって起こされる心の内の禍も、人は国祖国治立命、豊国姫命二神のお力を得て、仏教で言う貪瞋痴の三毒、即ち貪欲(どんよく)、瞋恚(しんい)、愚痴(ぐち)を消滅すれば、良坤二神のように、たとえ天教山の火口に飛び入ってもその火は清涼の風と感じられるのです。

〔三毒〕は善根を毒する三種の煩惱(心身を悩ませるもの)で、<sup>どんよく</sup>貪欲・<sup>しんい</sup>瞋恚・<sup>ぐち</sup>愚痴をさします。「貪欲」とは自己の欲するものに執着して飽くことを知らないこと。欲深いこと。「瞋恚」は自分の心に逆らうものをいかりうらむこと。怒り。「愚痴」は言っても仕方がないことを言っても嘆くこと。また、その言葉です。

二、

② 三千世界の梅の花 ③ 一度に開く神の教 ④ 開いて散りて実を結ぶ  
月日と地の恩を知れ この世を救ふ生神は 高天原に神集ふ

現界、幽界、神界の三界の統一が初めて完成し、神の教が一斉に開き、梅花が開いて実を結ぶように苦

労の結晶の花が咲き匂ひ、うるはしき実を結ぶ神政の世を迎える。

月と太陽と大地の恩（恵み）をよく考えなさい、この世を救うのは真の神であり、また人である。そして教えを实践する人々が綾部の大本（高天原）に集まって来る。

②『三千世界の梅の花』は入蒙記第二章「神示の経綸」に

其初発の神諭には『三千世界一度に開く梅の花、良の金神の構ふ世になりたぞよ、須弥仙山《宇宙で最も高い山》に腰をかけ、三千世界を守るぞよ』と大獅子吼をされてみます。此神示を略解すれば、三千世界とは、神界幽界現界の三大境界であり、過去現在未来をも指して居ります。梅の花の梅は言霊学上、エと云ふことになる、エは万物の始、生命の源泉であり、用は【ス】といふことになり、スは一切統一の意味であります。又スは清浄潔白スミキリの意味ともなる。花とは初めて成るの意であり、最初の意味であり、教祖の意味ともなる。主の神が空前絶後の大神業をいよいよ開始し、最初の御理想たる黄金世界を地上に完全に建設し玉ふといふ芽出度き意味であります。【入蒙記/2 神示の経綸】

即ち神の教え（大本神諭、霊界物語）によって三千世界が統一されミロクの世建設が完成されることであります。

③『一度に開く梅の花』

第2巻 序文 にも「そして、『三千世界一度に開く』と宇宙の経綸を豎に、しかも完全に言ひ表はし、句の終りにいたって『梅の花』とつづめたる所、あたかも白扇を拵げて涼風を起し、梅の花の小さき葉をもつて之を統一したる、至大無外、至小無内の神権発動の真相を説明したまひしところ、到底智者、学者などの企て及ぶべきところではない。」と示されています。【2/序文】

さらに、第5巻 第26章「良坤の二霊」では

轟然たる大音響とともに突然爆発したる天教山の頂上より、天に向つて打ち上げられたる数多の星光は、世界の各地にそれぞれ落下した。

これは第四巻に示す地球の中軸なる大火球すなはち根底の国に落ちて、種々の艱難辛苦をなめたる各神の身魂の時を得て、野立彦命の神徳により地中の空洞を開き、天教山の噴火口に向つて爆発したのである。俗に地獄の釜の蓋が開くと云ふはこのことである。また『天の岩戸開き』と云ふのも、これらを指して云ふこともあるのである。

地上に散布せられたる星光は、多年の労苦に洗練されて天授の真靈魂に立替はり、ことに美はしき神人として地上に各自身魂相応の神徳を發揮することとなつた、これらの顛末を称して、『三千世界一度に開く梅の花』と謂ひ、【5/26 良坤の二霊】とあります。

④『開いて散りて実を結ぶ』

また各身魂の美はしき神人と生れて、神業に参加するの状態を指して、『開いて散りて実を結び、スの種子を養ふ』といふのである。

かくして野立彦命は世の立替へ、立直しの先駆として、まづ世に落ちたる正しき神を一度に岩戸を開き、地獄の釜の蓋を開いて救ひたまひ、世界改造の神種と為し給うたる最も深遠なる御経綸である。【5/26 良坤の二霊】

とあり国祖御引退の後正しき神達も国祖にならつて根底の国に赴かれ艱難辛苦を経て国祖の御復権（二度目の天の岩戸開き）と共に再び地上に出られることをいいます。

また、教えが一時的な廃れ再び本当の実を結ぶとことを意味しているようにも思われます。

さらに第六巻 第二四章「富士鳴戸」に、

「茲に当山の神靈たりし木花姫は、神、頭、幽の三界に出没して、三十三相に身を現じ、貴賤貧富、老幼男女、禽獣虫魚とも変化し、三界の衆生を救済し、天国を地上に建設するため、天地人、和合の神と現はれたまひ、智仁勇の三徳を兼備し、国祖国治立命の再出現を待たせ玉ひける。木花姫は頭、幽、神における

三千世界を守護し玉ひしその神徳の、一時に顕彰《明らかに現れる》したまふ時節到来したるなり。

これを神諭には、『三千世界一度に開く梅の花』と示されあり。木花とは梅の花の意なり。」とあります。

【6/24 富士鳴戸】

『一度に開く神の教』はそのまま素直にとらえればよいでしょう。

『月日と地の恩を知れ』は太陽と月と大地の恩を考えなさいと言うことです。霊（精神）的には太陽は陽であり霊で、巖で、経で、善であります。また月は陰であり体で、瑞で、緯で、悪であります。そして大地はこの世を天と地に二分した時の大地です。また、体（物質）的には太陽も月も我々の生活には無くてはならない、大きな恩恵を与えられて居ることはご存じの通りです。さらに大地からも大きな恩恵を受けており、大地が無ければ我々は生存出来ません。日の恩はすぐ浮かびますが月の恵みは近年ようやく認識されるようになりました。しかし、大地からの恵みはまだ忘れがちのようです。二代様はよく大地の恩を忘れぬようにと申されおられました。

『この世を救ふ生神は 高天原に神集ふ』はこの世を救うのは真の神であり、また現界においては神の代行者たる人です。そして教えを实践する人々が地の高天原である綾部の大本に集まってくるのです。

三、

⑤神が表に現はれて おおなおひ 大直日	善と悪とを立別ける	⑥この世を造りし神直日 かむなおひ 神直日	心も広き
ただ何事も人の世は	⑦直日に見直せ聞直せ	身の過は宣り直せ のり	

世に隠れてご守護下さっていた神がいよいよ表に現われて身魂の善悪のけじめをハッキリとつけられます。

この世をお造りになった大神の直靈魂より戴いた（この世は直靈魂である主神によって創られた）大直日によって、心を広く持ち吾人の直霊の働きである省みる力を働かしなさい。

我々の身の回りに起きる総てのことは神から分け与えられた直霊の靈魂の働きによって見直し、聞き直して許し、善言美詞を用いて自他の過ちもよい方向に受け取って言い直しなさい。

⑤ 『神が表に現はれて 善と悪とを立別ける』

第6巻第33章「五大教」の中に

甲『只今の御歌の中に、「神が表に現はれて、善と悪とを立て別ける」といふ御言葉がありました。実際にこの世に、吾々を守つて下さる尊い神が在るのでせうか。善悪を公明正大に審判いて下さる誠の神が現はれますのでせうか。吾々はこの事のみが日夜気にかかつてなりませぬ』

宣伝使《東彦》は答へていふ。

『この世界は誠の神様が、御造り遊ばしたのである。さうして人間は、御用を努める様に、神が御造りになったのである。神は人間を生宮として是に降り、立派な世を開かうと日夜焦慮して居られます。あなた方一同の肉体もまた、尊き神様の靈魂と肉とを分け与へられて造られた人間である。さうして神様の生宮となつて、働くべき結構な万物の靈長である。然るに人間の本分を忘れて、ただただ飲食や、色の道ばかりに耽溺するのは、神様に対して、最も深き罪悪である。世の中には善の神もあれば、悪の神もある。さうして善の神一人に対し、悪の神は九百九十九人の割合に、今の世はなつてしまつてゐる。そこで神様は、この世界を清め、神の生宮たる人間の身魂を清めて、立派な神国を建むと思召し、宣伝使を四方に派遣され居るなり』

と、大略を物語りける。

甲『・・・一体今日の人間は、広い山や野を独占し、さうして吾々の働く処もなく、また働かしてもくれない。何ほど働くに追ひ付く貧乏なしと云つても、働く種がなければ、吾々は乞食でもするより、仕方がないではありませぬか。勿論吾々は、遊んで楽に飲んだり食つたり、贅沢をしようとは思ひませぬ。唯働い

て、親子夫婦が、その日をどうなりと、暮すことが出来ればそれで満足するのであります。然るに吾々は、この広い天が下に、脚踏み立てる場所も持つて居りませぬ。皆強い者、大きな者に、独占されて、働くに処なく、親子兄弟は、ちりぢりばらばらになり、天が下を苦しみながら、漂浪ひつつわづかにその日を暮してをります。こんな世の中を立替へて御日様の御照しの様に、万遍なく、吾々にも天地の恵が身に潤ふ事ができるならば、こんな有難いことはなからうと思ひます。さうしてその結構な神様は何時御現はれになりませうか』

と首を傾け、宣伝使の顔を覗き込む。宣伝使は両眼に涙を湛へながら、

『空翔つ鳥も、野辺に咲く花も、みな神様の厚き恵をうけて、完全に生活を続けてをります。況んや万物の靈長たり、神の生宮たる人間に於ておや。神様の御守りがどうして無いといふ事がありませうか。ただ何事も神様の御心に任せ、今日只今を、有難い有難いで暮して行けば、神様は花咲く春に会はして下さいます。世の中は暗夜ばかりではない、暗夜があつても何時かは夜が明ける。冷たい雪の降る冬があれば、また長閑な花咲き鳥唄ふ春が出て来る様に、きつと苦みの後には楽しみがあります。あなた方も働く場所がないからといって、そこら中を漂浪ひなさるのも、無理はありませんが、この世界は皆神様のものである。人間のものは、足の裏に附いて居る土埃一つだもありません。今の人間は広大な山野を独占して、自分のもののやうに思つてゐるが、命数尽きて、幽界に至るときは、いかなる巨万の財宝も、妻子も、眷属《手下、部下》も一切を捨てて、ただ独トボトボと行かぬばならぬのである。唯自分の連れとなるものは深い罪の重荷ばかりである。あなた方も、神を信じ、誠一つの心を持つて、この広い天地の間に活動なさい。きつと神様が幸を与へて下さいます。この地の上の形ある宝は、亡ぶる宝であります。水に流れ火に焼かれ、虫に蝕はれ、錆朽ちる、果敢ない宝である。それよりも人間は、永遠無窮に朽ちず、壊れず、焼けず、亡びぬ誠といふ一つの宝を神の御国に積む事を努めねばなりませぬ』と諄々として五大教の教理を説き勧めたる【6/33 五大教】

神様はこの世が創られたその時から存在しています。「表に現れて」とはそれを感じるかそうでないかが問題なのです。自分の心の中で確認することが必要です。すでに、明治二十五年、良の金神国常立尊が再現されミロクの世への最終段階に入ったのです。

### 第34章「三大教」では

二人《東彦、北光の天使》の宣伝歌を合一して、一つの歌に延長したり。

『神が表面に現はれて 善と悪とを立て別ける 魂を研げよ立替へよ 身の  
行為も立直せ  
この世を造りし神直日 靈魂もひろき大直日 ただ何事も人の世は 直日に見直  
せ聞き直せ 身の過失は宣り直せ』 【6/34 三大教】

### 第36巻第13章「恵の花」に

幼年の頃より無抵抗主義の三五教の道を聞きながら、神の大御心を忘却し、暴に対するに暴をもつてし、悪魔の憑依せる竜雲を討伐せむとしたる吾心の愚さよ、否無残さや。兵は所謂凶器である。先頃も一挙にして彼竜雲を討伐せむとし、数多の部下に武装を凝らさせ、神地城の表門より闖入し、敵を打ち悩まさむとして却て味方を傷つけ殺したる事、返す返すも迂愚《世間の事情にうとく愚か》の骨頂《最上》、拙なるもの、悔いても及ばぬ殺生をしたものだ。如斯部下の人命を損し、天地の神の愛児を殺したる大罪人、如何でか彼竜雲を討伐する事を得む。竜雲如何に無道なればとてタールチン、キングス姫其他の人々を牢獄に投じ苦しめたれども、相当の飲食を与へ、且つ身体に危害を及ぼさざりしは実に見上げたやり方である。吾は彼に勝りて豺狼の心深く、王を思ひ、彼を憎むの余り、竜雲に従ふ悪人どもを片端より屠殺し国家の禍を絶たむとして、却つて敵の一人をも傷つくる事を得ず、味方の三分迄死傷を生じたるは全く天の誡めならむ。神が表に現はれて善と悪とを立て別けたまふとは此事であらう。竜雲も亦天地容れざる大罪人



なれども吾も亦彼に劣らざる大罪人なり。然るに忠臣義士と自任して討伐を企てたる吾心の浅はかさよ。

彼老人の言葉の中に自負心を脱却せよ！ と力を込め教へられたのは此事であらう。【36/13 恵の花】  
初めから竜雲が悪で自分は正義と決めてかかって、善ならば何をしてよいと思っている。自己の心に善悪を立て別ける必要があります。自負心（プライド）は自分こそはという奢り高ぶりです。それでは神に身を任す気持ちが出てきません。人は己だけで何程のことが出来るというのだろうか。

また、身の過ち、即ち過去の過ちを悔い改めるにはそれを隠しては改めることは困難です。

第8巻には朝日丸に乗り合わせた鬼城山の悪神、清熊（清彦）、猿世彦、駒山彦らの改心の様子が出てきます。心を改めた清彦は日の出神が高砂島に渡ったと聞き後を慕って乗船しています。三神は船の中で互いに旧悪を大衆の前で暴露し足を引っ張り合います。同船した日の出神が天地の神の高徳を説くと、にわかには暴風が吹き荒れるが宣伝歌により天候は急速に収まります。日の出神の神徳に感じた人々は集まって教理を拝聴するが日の出神は船内での噂を聞き面那雲の司の遭難を知り急きよ竜宮へ行きます。

残された清彦は自分の旧悪をさらけ出し改心の実を示します。そして日の出神の御名代として秘露の国に行き紅葉彦命と名を賜り守護職となります。また、猿世彦は智利の国のアリナの滝で三五教を広め、鏡の池で月照彦（大八洲彦命）の戒めを受け狭依彦司となります。ここでも月照彦の神によって旧悪を暴かれ一切の執着を捨て改心します。駒山彦もまた月照彦の神の教訓を受け、後に羽山津見神と改め黄泉比良坂の神業に参加します。その他淤藤山祇も同様です。

過去の罪を隠そうとする心は自分を守ろうとして過去を断ち切れない執着心の表れでしょう。一切を神に任せるという気持ちになれば執着心から解放され靈魂は副守護神の自縛から解放されます。

清彦のように、忍耐強さと総ての過去の罪悪をさらけ出し悔い改める心。何事も全てを神の御手に委ねる心もまた「宣り直し」ではないでしょうか。

以上がこの基本宣伝歌の本義であるとおもいます。

⑥ 『神直日、大直日』

第10巻第29章「言霊解三」には

○直日の霊は荒魂の中にも、和魂の中にも、奇魂の中にも、幸魂の中にも含有する。四魂中各自極めて美はしく、至つて細し《こまやかな美しさ》き霊の名称にして、善々美々なるものを謂ふとあります。

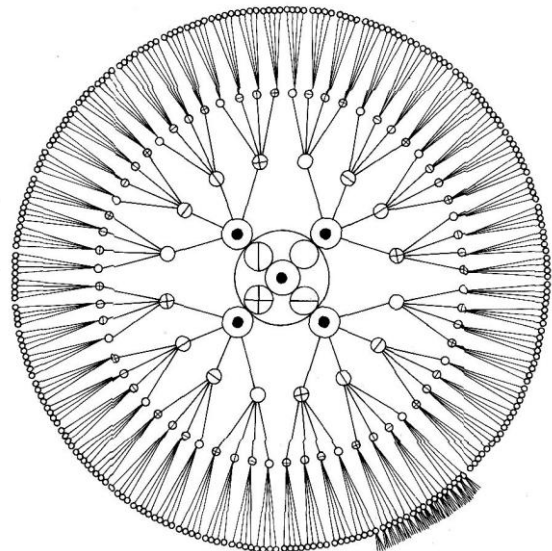
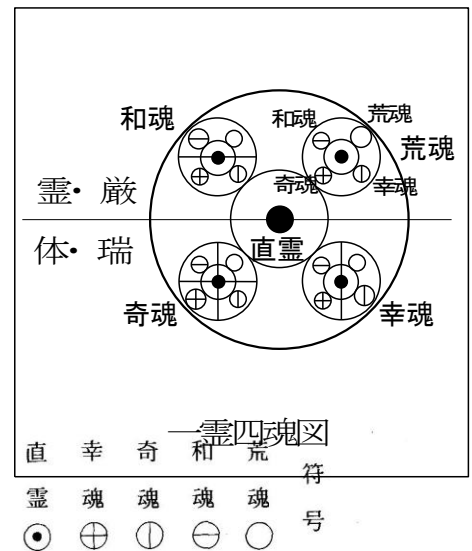
○神直日とは、天帝《真神》の本霊たる四魂に含有せる直靈魂を謂ふ。

○大直日とは、吾人上《天》帝より賦与せられたる吾魂の中に含有せる直靈魂を謂ふ【10/29 言霊解三】とあります。

直日は我々の魂の本体であり、省みると言う働をもっています。そして、直霊を中心に荒魂、和魂、幸魂、奇魂が具わっています。

◆ 『一霊四魂』

「大宇宙には、一霊四魂が原動力となりて、活機凛々乎として活動しつつあり。先づ小宇宙の一霊四魂に就て述ぶるならば、大空の中心に懸れる太陽は直霊にして、これを一霊ともいひ、大直日神とも



いふなり。

而して太陽には、荒魂、和魂、幸魂、奇魂の四魂が完全に備はり、その四魂はまた一々直霊を具有し、また分れ、また四魂を為して居る。さうして是らの直霊を神直日神かむなおいのかみといふ。その四魂また分派して四魂をなし、各々直霊を備ふ。大空の諸星は、皆一霊四魂を各自に具有し居るものなり。

而して太陽の一霊四魂を厳の身魂と総称し、かつ霊主体従の身魂ともいふなり。故に大空は霊を主とし、体を従とす。大空中に懸れる太陽、太陰および列星は、皆幽体を以て形成られあるなり。ゆゑに太陽、列星の中に鉦物ありと雖も、大地のごとく堅からず、重からず、その重量に非常の差あるを知るべし。

大空中における一霊四魂の分布状態を、仮に図を以て示せば左図《前頁》の如し。

大地は体を主とし、霊を従として形成られあり。故に木火土金水が凝結して生成化育を営みつつあるなり。太陽の靈魂を厳の身魂と称するに対し、地の霊を瑞の身魂といひ、体主霊従の身魂といふ。また大地球の直霊を大曲津日の神おほまがつひといひ、荒魂、和魂、幸魂、奇魂の四魂を備へ、その四魂は太陽のごとく分離してまた直霊を備ふ。その直霊を八十曲津日の神やそまがつひといふ。この四魂はまた更に分れ、際限無く大地一面に一霊四魂を分布されつつあるなり。【6/26 体五霊五】

そして人にも一霊四魂が具そなわっています。さらに動植物の靈魂から鉦物や器物など形有るもの総てに普遍します。

四魂にはそれぞれに働きがあり荒魂には勇ゆう、恥ち（はじる）。和魂には親しん、悔かい（くいる）。幸魂には愛あい、畏おそれる。奇魂には智ち、覺かく（さとる）の働きがあります。また、直霊には「省みる」の働きがあります。

「省、恥、悔、畏、覺の五情は靈魂中に含有す、乃ち神明の戒律なり。」【10/29 言霊解三】

現代風に云えば、五情はすでに我々のDNAに組み込まれており、正常な心の状態であれば自然に湧き起る、神の戒律(宗教における生活規律)です。

一 霊四魂表〔用(精神)から見る 第10巻第29章 言霊解〕

		四魂	四大	経	戒律	義	欲		
直霊(省)	高皇産霊神	荒魂	霊の体=火	勇(進奮勉克果)	恥	断	位(高)	争	曲霊
	霊系・経・厳	和魂	体の霊=水	親(平修斎治交)	悔	制	富(大)	悪	
	神皇産霊神	幸魂	体に体=地	愛(益造生化育)	畏	割	寿(長)	逆	
	体系・緯・瑞	奇魂	霊の霊=天	智(功感悟覚察)	覚	裁	名(美)	狂	

⑦ 『直日に見直せ 聞き直せ 身の過は宣り直せ』

甲「・・・ただ何事も人の世は、直日に見直せ聞き直せ云々」と仰せられましたが、一体これは何う云う事でありませうか。・・・若し神様がこの世に在らつしやるのならば、何故こんな不公平な事があるのに、黙つて見て居られるのでせうか。私はこの世に神の存在を疑ひます」ここに北光天使は、

『神様は至善至美至仁至愛の御方である。故に悪を憎み、無慈悲を御嫌ひ遊ばすのは云ふ迄もない。しかし人間はいかに立派な賢い者でも、神様の御智慧に比べて見れば、実に耻はずかしいものであります。災多く、悪魔の蔓延まんえん今日の世界の中は、どうしても無限絶対力におはします神様の力に依頼たよらねばならぬ。あなたが家を焼かれ、山林田畑りやくだつを掠奪され、女房を取られて、その怨みを晴らさうと思ひ、諸方を尋ね廻らるのは人情として尤もであり、吾々も満腔まんこうの同情をよせますが、併し、そこを人間は忍耐して、敵を赦してやらねばならぬのです。そこが人間の尊い所であつて、神様の大御心に叶うといふものです』【6/34 三大教】

第35章「北光開眼」

乙『宣伝使にお尋ねします。私は御存じのとほり、片目を剝むられました。幸ひに片目は助かつたので、どうなりかうなり、この世の明りは見えますが、時々癩しかに触ります。貴下の御話を承り、かつ御忍耐の強き

に感動しまして、私も貴下のやうに美しき心になつて、直日とやらに見直し聞き直さうと、覚悟は定めましたが、どうしたものか、腹の底に悪い蟲が潜んで居まして承知をして呉れませぬ。これでも神様の御心に叶ひませうか。どうやると、仇を討て、仇を討て、何をぐづぐづしてゐる。肝腎の眼球を剝られよつて、卑怯未練にもその敵を赦しておくやうな、弱い心を持つたと囁きます。どうしたら之が消えるのでせうか。どうしたら之を思はぬやうに、綺麗に忘れる事ができませうか』

北光彦『御尤です、それが人間の浅ましさです。しかし、そこを忍耐せなくてはならないのです。何事も惟神に任せなさい。吾々がかうして一口話をする間も、死の悪魔は吾々の身边を狙つて居るのです。また吾々の心の中には、常に鬼や悪魔が出入をします。それで人間は生れ付の直日の霊といふ立派な守護神と相談して、よく省みなくてはなりません。笑つて暮すも泣いて暮すも、怒つて暮すも勇んで暮すも同じ一生です。兎にかく忘れるが宜しい。仇を討つべき理由があり、先方が悪ければ神様はきつと仇を討つて下さるでせう。人間は何よりも忍耐といふことが第一であります。人を呪はず、人を審判ず、ただ人間は神の御心に任せて行けばこの世は安全です。何事も神様の御心であつて、人間は自分の運命を左右する事も、どうする事も出来ないものです。生くるも死するも、みな神様の御手の中に握られて居るのである。ただ人は己を正しうして人に善を施せば、それが神様の御心に叶ひ、幸福の身となるのです。人間としてこの世にある限り、どうしても神様のお目に止まるやうな善事をなすことはできませぬ。日に夜に罪惡を重ねてその罪の重みによつて種々と因縁が結ばれて来るのです。あなたが眼球を剝られたのも決して偶然ではありませんまい。本守護神たる直日に見直し聞き直し、省みて御覧なさい。悪人だと思つても悪人でなく神様に使はれてをる人間もあり、善人だと見えてもまた悪魔に使はれてをる人間もあります。善悪正邪は到底人間として判断は出来ませぬ。ただ惟神に任せて、神の他力に頼つて安養浄土《極楽浄土に同じ》に救うて貰ふのが人生の本意であります。『惟神霊幸倍坐世』

この言葉を聞いた甲は馬鹿にいられたと思ひ削竹を持つて宣伝使の右の眼をぐさと突いた。

北光天使『ア、天地の大神様、私は貴神の深き広きその御恵と、尊き御稜威を世の中の迷へる人々に宣伝して神の国の福音を実現することを歎びと致します。殊に今日は廣大無辺の御恩寵を頂きました。二つの眼を失つた人間さへあるに、私は如何なる幸か一つの眼を与へて下さいました。さうして一つのお取り上げになつた眼は、物質界は見ることは出来なくなりましたが、その代りに、心の眼は豁然《心の迷または疑惑のにわかには解けるさま》として蓮の花の開くが如く明になり、三千世界に通達するの靈力を与へて下さいました。今日は如何なる有難い尊き日柄でありませう。天地の大神様に感謝を捧げます』 【3/35 北光開眼】

### 第36章「三五教」

五大教の宣伝使東彦天使は、北光天使の無限の慈悲心と、その忍耐力に感服し、口を極めてその徳を讃嘆し、かつ天地に向つて、

『吾々は宣伝使の聖き職にありながら、かくまで仁慈深く、忍耐強く世に処する事はできなかつた。実に神に対しても恥かしく、且つ申訳もなき次第であつた。今日まで、意気揚々として自分は最も聖き者、正しき者、かつ博愛に富み忍耐強き者と自惚れてみた。然るに三大教宣伝使の心と、その行ひの立派さ尊さ、吾々宣伝使はその足下にも寄りつけない。嗚呼今日は慈愛深き大神様の御恵みによつて、活たる教訓をうけました。嗚呼今日極めて尊き神様の大御心を覺らして頂きました。過去を顧みれば、私はヨウも大きな面をして、宣伝歌を謡ひながら、天下を遍歴したことでせう。かくのごとく不純にして愛の欠けたる吾々が、天下の人々に向つていかに口を酸くして説き諭すも、何ほど骨を折るも、その効果の挙がらないのは当然であります。嗚呼神様よ、自惚強き、力弱き、心の暗き盲目同様の吾々を、今日までよくも赦して下さいました。私のごとき盲目が、世の中の盲目の手を曳いて、暗の地獄へ導いたことは何ほどか判りませぬ。一生懸命に心を尽し、身を尽し、神様の誠の御用を努めさして頂いた積りで、神様の御邪魔ばかり致

して居りましたことを、今更の如く悔悟いたします。ドウカ吾々の心に一つの灯火を照らさせ給うて、三大教の宣伝使北光天使様のやうな、聖き美はしき、仁慈に富める、耐へ忍びの強き天使とならしめ給へ。吾々に天津神より下し給うたる、直日の御霊の⑧本守護神をして、天地に輝き渡る美はしき、⑨伊都能売の靈魂として、御用の一端に御抱へ下さらむことを願ひ奉ります』 【6/36 三五教】

### 第37章「雲掴み」

神示の「見直せ聞直せ」の戒律は破ることが出来ぬので、わざと従順に彼が為すままに任せてみた・・・

高彦『吾は三五教の宣伝使である。何事も見直し聞直し、過ちを宣り直すのが吾々の主旨であるから、決して汝らを憎しとは思はぬ。何れも皆神様の最愛の御子である。吾々もまた神の愛し給ふ御子である以上は、汝らと吾らは同一の神の御子であつて、いはば兄弟である。吾々はどのようにして兄弟を虐げることができるであらうか。神は広く万物を愛し給ふ。吾らは尊き神の御子なれば、互に相愛し相助けねばならぬ。人間に差別を付けるといふことは、最も神の嫌はせ給ふところである。汝らも今迄の心を改め、本心に立ち帰り、神の尊き御子として、善を行ひ人を助け、神様の大御心に副ふ至善の行ひをするが人間の本分である』 【6/37 雲掴み】 その他「神直日大直日に見直し聞直し」が使われている箇所として

### 第7巻第16章「釣魚の悲」

日の出神は莞爾《にっこり》として、事も無げに、『世の中は老少不定《人の死期は定まりないもので、老少（老若）とは無関係である》、会者定離《この世は無常で、会うものは必ず離れる運命にある》だ。一切万事人の運命は神の御手に握られて居る。生くるも神の御慮、死するも神の御慮ぞ。唯何事も人の世は、直日に見直せ聞き直せ、身の過は宣り直せ。また来る春に相生の、松も芽出度き親子夫婦の再会を、必ず得させ玉はむ。汝はこれより本心に立ち帰り、三五教の教を守り、天地の神を真心より讚美し奉れ』と教へ玉へば、・・・ 【7/16 釣魚の悲】

「一切万事人の運命は神の御手に握られて居る」のだから、全てを神の御手に委ねればよいのです。しかし、自分の力で何事も成し遂げて来たとして錯覚している現代人（大人も含めて）には、果たしてどれだけの人が一切を神に委ねる心を持っているのでしょうか。どん底の生活を経験してこそ得られる心境かも知れません。

### 第7巻 第36章「豊日別」 日の出神は憐れを催はして、

『人間は総て神様の分霊であります。生れつき悪人は一人も無い。唯心の弛みより種々の悪魔に左右されて、悪行を為すのであつて、決して肉体の所作ではない。肉体は皆その悪神に使はれるのであるから、そこで神様は直日に見直し、聞き直し、宣り直し給ふのである。又その悪魔と雖も、心を改むればきつと御許しになるのである。況して神の分霊たる人間の貴方、必ず御心配あるな』 【7/36 豊日別】

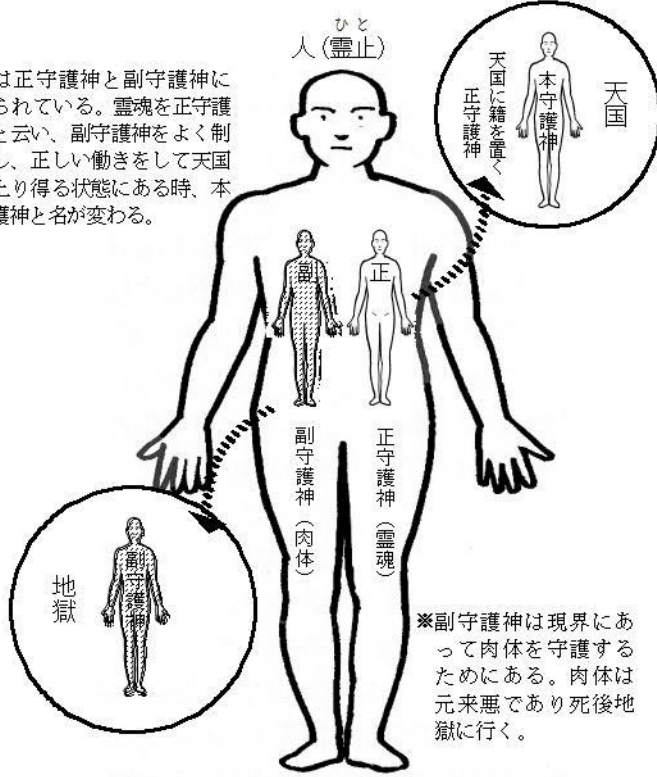
### 第25巻第5章「酒の滝壺」

清公『世の中は一切万事惟神の御経綸に左右されて居るものだ。俺が地恩城で大野心を起し、宇豆姫を得むとして終生拭ふ可らざる大恥を搔いたのも、今になつて省みれば、実に仁慈無限の大神様の御恵であつた。己に出づるものは己に帰る。悪い事をすればキツト悪い酬いが来るのは当然だ。然るに何ぞや。あれだけ体主靈従的陰謀を組立て、其結果斯様な結構な宣伝使となり、此冠島に自由自在に開放的に宣伝せよとの許しを受けたのは、悪が自然に善の結果を齎した様なものだ。これと云ふのも全く神様が神直日大直日に見直し聞直し、活かして働かして下さる有難き思召し、逆境に立ちて初めて神の慈愛を知り、宇宙の真善美を味はふ事を得た。 【25/5 酒の滝壺】

### 第34巻第8章「暴風雨」

何事も善意に解釈し、神直日大直日に見直し聞直し、何事が出来ても、神様の恵を感謝し、災に会つて

※人は正守護神と副守護神に守られている。靈魂を正守護神と云い、副守護神をよく制御し、正しい働きをして天国に上り得る状態にある時、本守護神と名が変わる。



※副守護神は現界にあって肉体を守護するためである。肉体は元来悪であり死後地獄に行く。

も神を忘れず、喜びに会うても神を忘れぬ様に、誠一つを立てぬきさへすれば、神様が助けて下さるに違ひない。

#### ⑧ 『本守護神（正守護神、副守護神）』

『直日の御霊の本守護神をして』とあるように人の本体は直日の御霊です。別名を本守護神と云います。

現界に居る人は身魂みたまというように肉体と魂とが一体になっています。肉体を維持して行くのに必要な霊を副守護神と云い、神より来たる霊を正守護神と云います。従って人(靈止)が現界に居る時は正、副の二霊の守護神によって守られています。そして、正守護神が正しい働き

をして天国に行く状態を本守護神と云います。

#### 第10巻第15章「言霊別」

総て地上の神人は、霊より肉へ、肉より霊へと、明暗生死、現幽を往来して神業に従事するものであるから、太古の神人が中古に現はれ、また現代に現はれ、未来に現はれ、若がへり若がへりして、永遠に霊即ち本守護神、即ち吾本体の生命を無限に持続するものなるが故に、その考へを頭脳に置いて此物語を読まねば、幾多の疑惑や矛盾が湧いて来るのは当然である。

#### 第47巻第七章 酔よひの八衢やちまた [一二四〇]

『人間の肉体は所謂精霊いはゆるの容物だ。精霊の中には天国へ昇つて天人となるのもあれば、地獄へおちて鬼となるものもある。天人になるべき霊を称して、肉体の方面から之を本守護神ほんと云ひ、善良なる精霊を称して正守護神と云ひ、悪の精霊を称して副守護神と云ふのだ』

『人間の体の中には、さう本正副と三色も人格が分つて居るのですか』

『マアそんなものだ。吾々は天人たるべき素養を持つてゐるのだが、肉体のある中に天人になつて、高天原の団体に籍をおく者は極めて稀だ。今の人間は大抵皆地獄に籍をおいてゐる者ばかりだ、少しマシな者でも、漸やうやくに精霊界《中有界》に籍をおく位なものだよ。此精霊界に於て善悪正邪さばを審かされるのだから、最早過去の罪を償つぐなふ術すべもない。あゝ之を思へば、人間は肉体のある中に、一つでも善い事をしておきたいものだなア』

#### 第47巻第12章 「天界行」

高天原の各団体に居住する霊国天人及び天国の天人は愛を生命とし、而して一切を広く愛するが故に人の肉体を離れて上り来る精霊の為にも所在厚誼《心からの親しいつきあい》を尽し、懇篤こんとく《ねんごろ》なる教訓を伝へ、或あるひは面白き歌を歌ひ、舞曲を演じ、音楽を奏しなどして、一人にても多く之を高天原の団

体へ導き行かむと思ふ外、他に念慮《おもい》は少しもないのである。之が所謂天人の最高最後の歓喜悦楽である。併しかし乍ら精霊が人の肉体を宿とし、現世に在りし頃善霊即あち正守護神の群に入るべき生涯や、或は天人即ち本守護神の群に至るべき生涯を送つて居らなかつたならば、彼等精霊は之等の天国的善霊を離れ去らむと願ふものである。斯の如くにして精霊は遂に現世に在つた時の生涯と一致する精霊と共に群居するに非ざれば、どこ迄も此せん転遷《移り変わる》を休止せないものである。……

斯の如く自己生前の生涯に準適《順適＝合う》せるものを発見するに及んで、彼れ精霊は茲に又在世中の生涯に相似せるものと共に送らむとするものである。実に霊界の法則は、不思議なものと云ふべきである。

《 天国にいる天人は天国に上ってくる精霊に対して、懇切に教訓を伝え、歌舞音楽を奏して楽しませたいという思い以外何もないようです。天国に行こうと思つたら、生前現世にあつたとき善い行いをして正守護神や本守護神と同じ心の状態を維持していかなかつたら行きません。それは必然的に己の心の状態と同じ所を選んで移り行くからです（同気相い求む）。霊界は想念の世界であるが故に同じ心の状態、気持ちの合った精霊としかいられないのです。現世でもそれは同じで、考え方や気持ちが合えば仲間をつくりませんが、心が合わなければ自然と離れていく物です 》

凡て人間の身には善と悪と二種の精霊が潜在してゐる事は前に述べた通りである。而して人間は善霊即ち本守護神又は正守護神に仍つて高天原の諸団体和合し、悪霊即ち副守護神に仍つて地獄の団体と相応《心と心の作用などが和合する》の理に依りて和合するものである、此等の精霊は高天原と地獄界の中間に位する中有界即ち精霊界に籍を置いてゐる。此精霊が人間に来る時には、先づ其記憶中に入り、次に其想念《かंगाえ思ふ》中に侵入するものである。而して副守護神は記憶及想念中にある悪き事物の間に潜入し、正守護神は其記憶や想念中にある最も善き事物の裡に侵入し来るものである。されど精霊自身に於ては其人間の体中に入り、相共に居る事は少しも知らないものである。而も精霊が人間と共なる時は凡て其人間の記憶と想念とを以て、精霊自身の所有物と信じてゐる。

《 人間の体内には正副二種類の精霊が潜在している。正は本守護神又は正守護神で善霊で、本守護神は天国と通じあつている。また、副は副守護神で悪霊で、地獄と通じあつている。人間の体内に在る時は記憶の中に入り込み、更に想念（思い）の中に入り込む。正守護神は善い記憶や想念と結びつき、副守護神は悪い記憶や思いと結びつく。しかし、どちらも自分が人間の体内にいるとは思っていない、それは記憶や想念が自分自身の物だと信じているからです 》

又彼等精霊なるものは、人間を見ることはない。何故なれば、現実の太陽界に在る所の者は、彼等精霊が視覚の対境《対象》とならないからである。大神は此等の精霊をして、其人間と相伴へる事を知らざらしめむが為に大御心を用ひ給ふ事頗る甚深《はなはだ深い》である。何故なれば彼等精霊がもし此事を知る時には、即ち人間と相語ることあるべく、而して副守護神たる悪霊は人間を亡ぼさむ事を考へるからである。副守護神即ち悪霊は根底の国の諸々の悪と虚偽とに和合せるものなるが故に、只一途に人間を亡ぼし地獄界へ導き、自分の手柄にしようききうと希求《願いもとめる》するの外、他事ないからである。而して副守護神は暫に人間の心霊即ち其信と愛とのみならず、其肉体をも挙げて亡ぼさむことを希求するものである。故に彼等の悪霊が人間と相語らふことがなければ、自分は人間の体内にあることを知らないのだから、決して害を加へないのである。彼等悪霊は其思ふ所、其相互に語る所の事物が、果して人間より出で来るものなりや否やを知らないのである。何となれば彼等精霊の相互に物言ふは、その実は人間より来るものなれども、彼等は之を以て自分の裡よりするものなりと信じ切つてゐる。而して何れの人も自分に属する所を極めて尊重し、且之を熱愛するが故に、精霊は自ら之を知らないけれども、自然的に人間を愛し、且つ尊重せなくてはならない様になるのである。これ全く瑞の御霊大神の御仁慈の御心を以て、かく精霊に人間と共なることを知らしめざる様取計らひ給うたのである。

《 精霊は自分が人間の肉体の中にいるとは思っていない。それは視覚の対象外だ（見えていない）からです。このことは神が御心をお遣いになったからです。もし副守護神（悪霊）が自分はその肉体中にあると知ったら、ひたすら肉体を滅ぼし根底の国へ連れて行こうとします。それが自分の手柄となるからです。副守護神に限らず悪霊が人間と会話する事がなければ、自分は人間の体内にあることを知らないから、決して害を加へません。悪霊が思い語っていると信じている事は、実は人間より来ているものなのです。人は誰も自分に属する物は極めて尊重し、且つ熱愛するが故に、精霊もまた自然に人間（自分自身と思っている）を愛し、且つ尊重する様になるのです。これは全く瑞の御霊大神の御仁慈の御心で、このように精霊が人間の体内に居ることを悟らせないようになさったからです 》

天国の団体に交通する精霊も、地獄界と交通せる精霊も亦同じく人間に付添うてゐるのは前に述べた通である。而して天国の団体に交通してゐる精霊の最も清きものを真霊又は本守護神と云ひ、稍劣つたものを正守護神と云ひ、地獄と交通する精霊を悪霊又は副守護神といふのである。

#### 第48巻第一章「聖言」

霊なるものは神の神格なる愛の善と信の真より形成されたる一個体である。而して人間には一方に愛信の想念あると共に、一方には身体を發育し現実界に生き働くべき体欲がある。此体欲は所謂愛より来るのである。併し体に対する愛は之を自愛といふ。神より直接に来る所の愛は之を神愛といひ、神を愛し万物を愛する、所謂普遍愛である。又自愛は自己を愛し、自己に必要な社会的利益を愛するものであつて、之を自利心といふのである。人間は肉体のある限り、自愛も又必要欠くべからざるものであると共に、人は其本源に遡り、どこ迄も真の神愛に帰正しなくてはならぬのである。要するに人間は霊界より見れば即ち精霊であつて、此精霊なるものは善悪両方面を抱持してゐる。故に人間は靈的動物なると共に又体的動物である。精霊は或は向上して天人となり、或は墮落して地獄の邪鬼となる、善悪正邪の分水嶺《分かれ道》に立つてゐるものである。而して大抵の人間は神界より見れば、人間の肉体を宿として精霊界に彷徨《さまよう》してゐるものである。而して精霊の善なるものを正守護神といひ、悪なるものを副守護神と云ふ。正守護神は神格の直接内流を受け、人身を機関として天国の目的即ち御用に奉仕すべく神より造られたもので、此正守護神は副守護神なる悪霊に犯されず、よく之を統制し得るに至れば、一躍して本守護神となり天人の列に加はるものである。又悪霊即ち副守護神に圧倒され、彼が顧使《あごで指図して人を使う》に甘んずる如き卑怯なる精霊となる時は、精霊自らも地獄界へ共々におとされて了ふのである。

《 靈魂は神の神格（神の本質）である愛の善（天国）と信の真（霊国）より形づくられた一個体です。人間はこの神の神格を受け継ぐ愛信の想念と共に肉体を發育、維持する体欲があります。体欲は同じ愛から来ているといつても自分だけを利するのが目的の愛であり、これを自愛又は自利心といいます。神より直接来る愛を神愛といひ、神を愛し万物全てを愛する愛を普遍愛といひます。人は現界に生きる以上は自愛は必要か欠くべからざるものですが、魂の根源に立ち帰り真の神愛と結びつかなくてはならないのです。

人間は霊界より見れば善悪両面を持った精霊であり、靈的動物であると同時に体的動物です。魂の向上によって天人ともなり、墮落すれば地獄の邪鬼ともなります。又、神界より見れば人間の肉体を宿として精霊界にさ迷っているのです。

正守護神は愛信の想念を直接神より受け、肉体を機関として天国の目的即ち御用に奉仕（地上天国の建設）するために神より造られたもので、正守護神は副守護神である悪霊に犯されず、よくこれを統制出来れば、一挙にして本守護神となり天人の列に加はるのです。又悪霊即ち副守護神に圧倒され、逆にあごで使われるような卑怯な精霊となれば、精霊自身も地獄界へ共々におとされてしまうのです。

これより人には正副二種の守護神が内在しています。そして、人の本体とも云うべき精霊は正守護神で、肉体を



維持するための精霊が副守護神です。天国に上り得る正守護神を本守護神と云います。死後、正副両守護神とも八衢に行きます。

## 参 考

### 魂魄こんぱくの意味

〔国語辞典〕 魂は精神を、魄は肉体をつかさどるたましい〔死者のたましい。靈魂〕

〔出典：フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia) 』

魂魄（こんぱく）は、中国の道教や伝統中国医学における霊についての概念である。以下記述する。

### 道教の魂魄

中国の道教では魂と魄（はく）という二つの異なる存在があると考えられていた。魂は精神を支える気、魄は肉体を支える気を指した。合わせて魂魄（こんぱく）とも言う。魂と魄は易の思想と結びつき、魂は陽に属して天に帰し（魂銷）、魄は陰に属して地に帰すと考えられていた。民間では、三魂七魄の数があるとされる。三魂は天魂（死後、天に向かう）、地魂（死後、地に向かう）、人魂（死後、墓場に残る）であり、七魄は喜び、怒り、哀しみ、懼れ、愛、悪しみ、欲望からなる。また、殭屍（キョンシー）は、魂が天に帰り魄のみの存在とされる。

（三魂は「胎光・爽霊・幽精」「主魂、覺魂、生魂」「元神、陽神、陰神」「天魂、識魂、人魂」、七魄は「尸狗、伏矢、雀陰（陰）、容賊（吝賊）、非毒、除穢（陰穢）、臭肺」とされる事もある。）

### 儒学における魂魄現象の解釈

儒学（すなわち公式な学問）の解釈では、張載（11世紀）の鬼神論を読んだ朱子の考察として、世界の物事ものごとの材料は気であり、この気が集まることで、「生」の状態が形成され、気が散じると「死」に至るとした上で、人間は気の内でも、精（すぐ）れた気、すなわち「精气」の集まった存在であり、気が散じて死ぬことで生じる、「魂は天へ昇り、魄は地へ帰る」といった現象は、気が散じてゆく姿であるとした[1]。この時、魂は「神」に、魄は「鬼」と名を変える（三浦国雄『朱子集』朝日新聞社）。この「魂・魄」から「神・鬼」への名称変更は、気の離合集散の原理の解釈によるもので、気がやって来るのは「伸」の状態であり、気が去っていくのは「屈」の状態であるとして、気の集散＝気の伸屈・往来と定義したことから、「神」は「伸」（シン）に通じ、「鬼」は「帰」（キ）に通じ、元へ戻る＝「往」（向こうへ行く）となる。ここに、鬼神＝気の集散の状態＝魂魄と至る。

「気は必ず散るものであり、二度と集まることはない」と儒学では定義しているが、これは仏教における輪廻転生という再生産を否定するためのものである。ただし、子孫が真心を尽くして祀る時、子孫（生者）の気と通じ感応することで、この世に「招魂」されるとする。一度、散じた気＝魂魄は集まらないとしつつも、招魂の時は特別とする、この一見して矛盾した解釈こそ重要であり、この説明がなければ、祭祀の一事を説明できなくなるためである。この現象に関して、後藤俊瑞は「散じた気が大気中に残存し、再び集まり来ることを許容するものである」としたが、この矛盾した解釈をめぐっては、日本の朱子学者を悩ませる種となり、林羅山に至っては、「聖人が祭祀を設けたために、鬼神（＝魂魄）の有無を半信半疑（中立的な立場）にならざるをえない」としている（『林羅山文集』巻三十五・祭祀鬼神）。これが因となって、日本近世では、無鬼論者[2]（伊藤仁斎）と有鬼論者（荻生徂徠）に分かれた。

### 初期仏教

ブッダが説いた初期仏教での「無我」は「靈魂がない」と解するのではなく「非我」の訳語が示すように、「真実の我ではない」と解すべきもの（自他平等の境地を目指した思想）である、ともされている。

### 日本での仏教

上記の初期仏教に関する上記の解説とは異なり、ブッダは「無我」を説いて靈魂を否定した、ともされる。近



年の日本の僧侶や仏教関係者によって執筆された仏教入門書等ではそのような図式で説明されていることが多い。

⑨『<sup>かむなから</sup>惟神』

玉鏡 568 「<sup>かむなからたまちはへませ</sup>惟神靈魂幸倍坐世」には以下のように示されている。

神様の御心のまにまに<sup>みたま</sup>靈の善くなるやうお願ひしますといふので、神様に対する祈りの言葉である。

それを祖靈の前で云ふのは、祖靈に祈つて居るのではなくて、祖靈のために大神様に祖靈が<sup>さち</sup>幸はふやうにと祈るのである。

「惟神靈幸倍坐世」は 大本に於ける祈りの言葉です。＝ 神様のみ心のままに一切をお任せし、どうぞ神靈の幸わいを賜りませ ＝ ということです。いかなる場合にも、先ず、『神の御心のままに』とするとところに人としての根本的態度があり、同時に罪深い我々の魂の向上を神に祈る事に重要な意味があります。仏教における南無阿彌陀仏は類似した言葉。 【第二章 用語の解説①参照】

⑩『伊都能売の御魂』

伊都能売とは「変性男子と変性女子の御魂とが一つになりて、いよいよ伊都能売魂の御用に変わりて来たから」とした神諭によるもので、巖と瑞とが合体した働きです。開祖は巖靈、聖師は瑞の靈の働きをされます。開祖が昇天された後には当然御筆先は出されなかったのですが、国常立尊（良の金神）が聖師（豊国姫＝坤の金神）に懸られて「伊都能売」の身魂として活動されることになり、出された神諭が伊都能売神諭です。

第6巻第26章「体五靈五」に

つぎに伊都能売の身魂に就て略述すれば、この身魂は、一に月の靈魂ともいひ、五六七の身魂と称せらる。五六七の身魂は、巖の身魂に偏せず、瑞の身魂にも偏せず、巖、瑞の身魂を相調和したる完全無欠のものなり。而して伊都能売の身魂は、最も反省力の強き活動を備へて、太陽のごとく常に同じ円形を保つことなく、地球のごとく常に同形を保ちて同所に固着すること無く、日夜天地の間を公行して、明となり、暗となり或は上弦の月となり、また下弦の月となり、半円となり、満月となり、時々刻々に<sup>かえり</sup>省みるの実証を示しあるなり。斯くのごとく吾人の身魂の活用し得るを、伊都能売の身魂といふ。伊都能売の身魂の活動は、時として瑞の身魂と同一視され、或は変性女子の身魂と誤解さるる事あり。

伊都能売の身魂は、変性男子の身魂にも非ず、また変性女子の身魂にもあらず。完全無欠にして明暗、遠近、大小、賢愚、肖不肖、善悪等の自由自在の活動をなし得る至粹至純の神靈の活用なり。【6/26 体五靈五】

伊都能売神諭 大正七年一二月二日 (P11)

<sup>うしろ</sup>良の<sup>こんじんくにとちたのみこと</sup>金神国常立尊が、明治廿五年から永らく<sup>なを</sup>出口直の体内を借りて、<sup>わかひぬきみ</sup>若姫君の尊と引添ふて変性男子と成りて、三千世界の世の<sup>たてかへ</sup>立替の<sup>しぐみ</sup>経綸を、<sup>かたき</sup>筆先に書して知らしたなれど、後の<sup>たてなを</sup>立直しの筆先は未だかかして無いから、変性女子の体内を藉りて是から時節に応じて書すぞよ。世の立替は世の元から<sup>しぐみ</sup>経綸いたして在る事が、一分一厘違はん、皆出て来る時節が迫りたのであるから、此経綸は変りは致さんなれど、世の立直しは人民の肉体を使ふて致さねば成らぬ事であるから、人民の改心次第で速くも成り、<sup>また</sup>亦遅れも致すから、是から変性女子と役員が確かり致して下さらんと、中々大事業であるから、一寸の油断も寸隙も無いぞ。二代の御世継は澄子に命令は下りて居るなれど、モウ少し立直しの筆先をかかねば成らぬから、<http://reikaimonogatari.net/index.php?obc=is01 - a020#a020>変性女子の体内を借りて筆先を出すから、今迄のやうな筆先の見やう致して居りたら大きな間違いが出来いたすぞよ。此筆先は国常立尊が変性女子の体内を借りて知らすのであるから、男子にかかした筆先とはチツトは筆の使い方が違ふなれど、<sup>けすじ</sup>神の<sup>けすじ</sup>経綸は毛筋も<sup>ゆる</sup>間違いは致さんから、其の覚悟で筆先を読み、腹帯を緩まんやうに致して下されよ。

伊都能売神諭は国常立尊（開祖＝変性男子）が変性女子（聖師）の体内を借りて書かれたものであり、巖、瑞合

体（伊都能売）して書かれたのです。

水鏡 133「王ミロク様」

天のミロクは瑞靈であり、地のミロクは嚴靈であり、人のミロクは伊都能売の靈であり、この三体のミロクを称して王<sup>わう</sup>ミロクといふのである。さうして総て神は人体を天地経綸の司宰者として地に現はしたものであるから、天地の御内流<sup>う</sup>を享けて御用に奉仕する現実の靈体が王<sup>わう</sup>ミロクの働きをするのである。【おほミロク】は大の字を書くのでなく、王の字をあつるのである。言靈学上から云へばオホミロクのオは神、又は靈、又は心及び治<sup>おさ</sup>むるの意義であり、ホは高く現はるる意味であり、ミは遍満具足して欠陥なき意味であり、水の動きであり、ロは修理固成の意味であり、クは組織経綸の意味である。天地人三才<sup>さんさい</sup>《天と地と人。宇宙間の万物》を貫通したるが王の字となるのである。

## 《 発 端 》

### 現代語訳

一、

1P ①私が明治三十一年旧二月九日、神使に連れられ丹波穴太（現在の京都府亀岡市）の靈山高熊山に、一週間の靈的修業を了えてより天眼通、天耳通《聖師は十歳で神より許される》、自他神通（相対する人を覚らしめる能力）、天言通、宿命通の大意を悟り、神の教を今日のように位置づけるまでには、②さまざまな騒ぎがあり、限りない込み入った事情がある。旧役員の反抗、信者の離反、国家権力の誤解、宗教家の迫害、親族、知友の総攻撃、新聞雑誌、単行本の非情な嘲笑など、実に文章や、言葉で言い表わせるものではない。私はただただ開教後二十四年間の経緯を、きわめて簡単に記憶より呼び起して、その一部分を示すことにする。

二、

③竜宮館《大本発祥の地》には④「変性男子」の神系と、「変性女子」の神系との二大系統が、はっきりと区別されている。⑤ 変性男子は神によって治められる時代が来ることの予言と、これから迎える時代の警告を發し、苦勞を重ねて神示を伝え、水をもつて肉体及び靈魂に洗礼を施し、救世主が再び生れ、再び救世主としてこの世に現れる事を待っておられた。ヨハネの初めてキリストに対面するまでには、ほとんど七年間人々に救世主を迎える準備をするよう野に在って叫んで来られたのである。

2P ⑥変性男子の肉体は女体男靈《女性の肉体に男性の靈魂が宿る》であって、五十七才になって初めて⑦-1嚴の御魂の神業に参加なされた。明治二十五年の正月元旦より、同四十五年の正月元旦まで、前後滿二十年の間、水《体的》洗礼によって、我々の住む現世の汚濁する靈体兩系の総てに洗礼を施し、世界改造の神策《優れた計画》をはっきりと示された。⑧あの第一次世界大戦などは、嚴の御魂のお働きの一部で、⑨三千世界への一つの大きな警告であったと思う。

三、

⑩変性女子の肉宮は⑦-2瑞の御魂の神業に参加奉仕し、火《靈的》によって世界万民に洗礼を施すのが神務である。明治三十一年の旧二月九日より神業に参加し、大正七年二月九日までの滿二十年間の靈的神業をほとんど完了した。物質万能主義、無神無靈魂説に、完全に心を奪われ、体主靈従の考え方がはびこる現代も、少しは目覚めたようで、神靈の存在を認識するものも、日に月に多くなって来たのは、すなはち神靈の偉大で、はかり知ることのできない働きの結果で、決して人の知恵や力の及ぶところではないと思う。

⑪変性男子の肉体はヨハネ（神政開祖）の神業に入ってから、二十七年間神筆を揮い、それによって靈体兩界の大改造が促進され、今は靈界に入っても、その神業を継続し奉仕されつつある

3P つぎに ⑫変性女子は三十年間の神業に奉仕し、そして ⑬五六七の神によって治められる世の到来を待ちながら、世界を善道にみちびき、かつ神の恵みを受けさせるのが神業である。神業奉仕《明治三十一年》以来、本年で滿二十三年間を経過した。残る七ヶ年こそが最も重大な任務遂行の難関である。大本神諭の言葉に

『三十年で身魂の立替立直しをいたすぞよ』と。

変性男子の三十年の神業を完成するのは、大正十一年の正月元旦である。変性女子の三十年の神業が成し遂げられるのは、大正十七年二月九日《昭和三年三月三日》である。神諭の、『身魂の⑭立替立直し』とあるのを、よく考へてみると、⑮主に水洗礼《変性男子》による靈体兩系の改造に三十年間が必要であり、これはヨハネの奉仕すべき神業である。体靈水洗礼による靈魂的改造に前後三十年を要するといふ神示である。しかし、三十年と神示されたのは、大略を示されたもので、決して確定的のものではない。伸び縮みや遅い速いは、どうしても免れないと思う。要するに、神界の 4P 御方針は一定不変であっても、⑯天地経綸の司宰《天地を治め整える主体》である奉仕者の身魂が研かれるか、そうでないかの結果によって変更されるのは止むをえない事である  
神諭に、

『⑰天地の元の先祖の神の心が眞実に徹底了解たものが少しありたら樹替樹直しは立派にできあがるなれど、

神界の誠が解りた人民が無いから、神はいつまでも世に出ることができぬから、早く改心いたして下されよ。一人が判りたら皆の者が判ってくるなれど、肝心のものに判らぬというのも、これには何か一つの原因が無ければならぬぞよ。自然に気のつくまで待ってをれば、神業はだんだん遅れるばかりなり、心から発根《納得》の改心でなければ、教へてもろうてから合点《承知》する身魂では、到底この御用は務まらぬぞよ。云々』

四、

実際の御経緯が分ってこなくては、過去にも、未来にも起こらない大神業に完全に奉仕することはできるものではない。御神諭に身魂の樹替樹直しといふことが書いてある。⑮ ミタマと言うのは、靈魂の事だけだと思っている人が沢山にいるらしい。身は身体、または物質界を指し、魂とは 5P 靈魂、心性《心の本来の姿》、神界等を示されているのである。すべて宇宙は靈が本《始め》で、体が末となっている。身の方面、物質的現界《我々の住む世界》の改造を断行されるのは国祖<sup>おおくにとこたち</sup>常立神であり、精神界、神靈界の改造を断行なさるのは、豊国<sup>とよくにぬし</sup>主神の権威である。ゆえに宇宙一切は靈界が主であり、現界が従であるから、これを称して⑯ 靈主体従<sup>れいしゆたいじゆう</sup>というのである。

靈主体従の身魂<sup>みたまひもと</sup>を靈の本の身魂<sup>たいしゆれいじゆう</sup>といい、体主靈従の身魂を自己愛智（ちしき）の身魂という。靈主体従の身魂は、全て神の定めた「天地の律法」に適った行動を好んで実行し、常に天下公共のために心身をささげ、犠牲的行動を取ることを喜びとし、至真《まこと》、至善《正しいこと》、至美《うつくしいこと》、至直《心がすなおなこと》の大精神を発揮し、世を救う神業に奉仕する神や人の身魂である。体主靈従の身魂は自分の利益のみに心を注ぎ、天地の神を畏れず、体慾を重んじ、衣食住にのみ気をつかい、利益を求めて集まり、利益が無いと見たら利益のある方に散って行き、その行動は常に要点を欠き、利己主義を推し進める以外、すこしの義務も考えず、慈悲《なさけ》とすることを知らず、心はあたかも山犬や狼のように残酷で無慈悲な不善の神や、人というのである。

五、

天の大神は、最初に⑳ 天足彦<sup>あだるひこ</sup>、胞場姫<sup>えぼひめ</sup>の二人を造り、人体の祖となされ、6P 靈主体従の神木に体主靈従（ちしき）の果実を実らせ、『この果実を喰うべからず』と厳しく命じ、その性質がどの様なものかを試してみられた。ふたりは体慾《物質欲》を押さえきれず、厳しい命令を破って、神の怒りにふれた。

これにより世界には体主靈従の怪しい気が発生し、神人界に邪悪分子の芽が生れるようになったのである。こう言うと、人は以下のように言かもしれない。

『神は全智全能であり知恵と徳は十分に備えておられる。どうして体主靈従の芽を刈りとり、さらに靈主体従の人体の祖に改造しなかったのか。体主靈従の祖を何ぞ放任し、それによって邪悪の世界をつくり、みづからその処置に苦しむのか。これでは私は神の存在と、神力とを疑はざるを得ない』

とは、実に功妙でもっとも至極な議論である。

しかしながら神には、わずかな依<sup>よ</sup>依<sup>よ</sup>ひいきもなく、逆行的《誤りだからと言って元に戻すような》神業もない。一度実行した神業は 昨日の出来事を 7P 今日に持ってこれないように、また一旦弓をはなれた矢が中途に還ってこないように、ふたたびこれを改めるのは、天地自然の成り立ちに反する。ゆえに神代一代《国祖ご隠退より再現にいたるまで》は、これを革め正すことの出来ないところに、儼然<sup>げんぜん</sup>とした神の権威が存在するのである。また一度出た神勅《お告げ》も、これを替えてはいけぬ。神からしてしばしばその神勅を替えてしまう様なことがあるとするなら、宇宙の秩序はここに全く乱れてしまい、つひには自由で気ままな気風が始まってしまう。

古い諺にも『武士の言葉に二言なし』と言うのがある。まして、宇宙の統治者である、神においてはなおさらである。神諭にも、

㉑ 『時節には神も叶はぬぞよ。時節を待てば煎豆にも花の咲く時節が参りて、㉒ 世に落ちてをりた神も、世に出て働く時節が参りたぞよ。時節ほど恐いものの結構なものは無いぞよ、云々』《物事の移り変わりには神も叶わない。時代を待てば煎った豆にも花が咲く時が来て、世に忍んでいた神も、世に出て働く時が来る。時節ほど有難く且つ恐いものは無い。云々》

と示された様に、この宇宙は神の計画通りに進歩、発展しているので天地の神も『時』の力のみは、どうにも為すことはできないのである。

六、

㊸天地剖判の始めより、五十六億七千万年の時を経て、いよいよ弥勒出現の時代となり、8P 弥勒の神が天よりお下りになって、神界、幽界、現界、三界の大改革を成し遂げ、松の世を実現するため、ここに神の御使人《出口聖師》を下し、悟りの道を示すため「苦・集・滅・道」を説き、「道・法・礼・節」を教え諭し、善を勧め、悪を懲し、至仁至愛の教を広め、世界を平和に治めるための天則を広く示し、神が意図する善政を天地《顕幽神三界》に拡大なさる時期が近づいてきたのである。

此れまでに千万億年の歳月を経て来たが、わたしは ㊹ これまでに経験したことの無い聖世《すぐれた天子の治める世》へ移り変わる時代に生れて来て、神業に奉仕することが出来るなら、こんな幸が何処にあるであろうか。神示には、

㊺『神は万物普遍の聖霊にして、人は天地経綸の司宰なり』《神は宇宙に存在する全ての物に普遍的に内在する聖霊であって、人はまた、この宇宙を治め、運営していくための重要な役割を担った責任ある存在である》と。アゝ私は今という、この時において何れの時代に、天地の神業に《ミロクの世を来たらすという神の事業に》奉仕することを出来るだろうか。

アゝ㊻言霊《言葉》の幸はう国、言霊の光り輝く国、言霊の生かされる国、言霊の助ける国、神によって造られた国、神徳の充ちている国に生を稟けた神国の人においては尚更である。神の恩は高く、そして深い事に感謝し、その上で国祖の広い御心に報いなければならないのである。

一、

出口王仁三郎・聖師が明治三十一年旧二月九日、富士山の神使芙蓉仙人に連れられ現在の京都府亀岡市の靈山高熊山に、一週間の靈的修業を終えられて天眼通、天耳通、等の神通力を得られた。聖師が今日のような位置につかれるまでには、さまざまな騒動があった。それは旧役員の反抗、信者の離反、国家権力の誤解、宗教家の迫害、親族、知友の総攻撃、新聞雑誌、単行本の非情な嘲笑など、実に文章や、言葉で言い表わせるものではなかったようだ。

二、

大本には「変性男子」の神系と、「変性女子」の神系の二大系統がはっきりと区別されている。変性男子（開祖）は神によって治められる時代が来ることを予言し、これから迎える時代の警告を発せられた。開祖は苦勞を重ねて神示を伝え、水をもつて肉体及び靈魂に体的方面の洗礼を施され、再び救世主がこの世に現れる事を待っておられた。新約聖書と同様に、ヨハネ（開祖）が初めてキリスト（聖師）に対面するまでに、ほとんど七年間人々に救世主を迎える準備をするよう野に在って叫んで来られたのです。

変性男子（開祖）の肉体は女体男霊（女性の肉体に男性の靈魂が宿る）で、五十七才の時初めて良の金神国常立尊が神憑りされ、嚴の御魂の神業に参加なされた。それは明治二十五年の正月元旦で、同四十五年の正月元旦までの二十年の間、体的（水）洗礼によって、我々の住む現世の汚濁する靈体両系の総てに洗礼を施し、世界改造の神策をはっきりと示された。それが大本神諭である。第一次世界大戦などは嚴の御魂のお働きの一部で、三千世界への一つの大きな警告であったとある。

一方、変性女子（聖師）の肉体は瑞の御魂の神業に参加され、世界の万民に靈的（火）洗礼を施すのが神務です。明治三十一年の旧二月九日の高熊山の修行から神業に参加し、大正七年二月九日までの満二十年間の間に靈的神業をほとんど完了された。物質万能主義が浸透し、やがて神の存在をすっかり忘れ、体主靈従の考え方がはびこる現代も神の存在を認識する人々が、しだいに多くなって来たのは、神霊の偉大な働きの結果で、決して人の知恵や力によるのではない。

三、

変性男子も変性女子もともに三十年の神業に奉仕された。開祖は二七年間御筆先を書かれ、昇天されてもなを神界にあって霊体両界の改造に奉仕されている。一方、聖師は世界を善道にみちびき、かつ神の恵みを受けさせるのが神業です。

大本神諭に、『三十年で身魂の立替立直しをいたすぞよ』とあります。開祖は大正十一年の正月で、聖師は大正十七年二月九日となります。

『身魂の立替立直し』というのは、主に水洗礼による開祖の霊体両方（靈魂と肉体）の改造に三十年間が必要であったということです。三十年という神示は決して確定的のものではなく、天地経綸の司宰（天地を治め整える主体）である奉仕者（ここでは開祖）の身魂が研かれるか、そうでないかの結果によって期間が変更されるのは止むをえない事です。

神諭に、

『天地の元の先祖の神の心が真実に徹底了解たものが少しありたら、樹替樹直しは立派にできあがるけれど、神界の誠が解りた人民が無いから、神はいつまでも世に出ることができぬから、早く改心いたして下されよ。一人が判りたら皆の者が判ってくるけれど、肝心のものに判らぬといふのも、これには何か一つの原因が無ければならぬぞよ。自然に気のつくまで待つてをれば、神業はだんだん遅れるばかりなり、心から発根の改心でなければ、教へてもらうてから合点する身魂では、到底この御用は務まらぬぞよ。云々』

この神諭は開祖に対するもので、聖師の本当の姿や御神業が開祖には理解できなかつたようです。そのため聖師は開祖を取り巻く人達から迫害を受けました。しかし、聖師こそが本当のミロクの大神でした。

四、

霊、魂、身魂と書いていずれも「ミタマ」と読みます。多くの人は「ミタマ」と言うと靈魂のことと思つていますが、身は身体、または物質界を指し、魂とは靈魂、心性（心の本来の姿）、神界等を指します。「身魂」と書かれた場合、神や人の身体と心、または物質界と神霊界を指します。

この宇宙の成り立ちは霊が本（初め）で、体が末です。したがって宇宙の全ては霊界が主となり現界が従となります。これを霊主体従というのです。そして我々の住む世界（体）を改造されるのは国祖天国常立神であり、精神界、神霊界（靈魂）の改造を断行なさるのは、豊国主神の權威です。これを称して霊主体従というのです。

霊主体従の身魂を霊の本（霊を基本とする）の身魂といい、「天地の律法」に適った行動を好んでし、常に天下公共のために心身をささげる犠牲的行動を取ることを喜びとします。真善美直の大精神を発揮し、世を救う神業に奉仕する神や人の身魂です。

体主霊従の身魂を自己愛智（ちしき）の身魂といい、自分の利益のみに心を注ぎ、天地の神を畏れず、体慾を重んじ、衣食住にのみ気をつかい、利益を求めぬ事のみ心に心を傾注します。その行動は利己主義を推し進めること以外、すこしの義務も考えず、慈悲（なさけ）とすることを知らず、心はあたかも野獣のように残酷で無慈悲な不善の神や、人の身魂です。

五、

天の大神は、最初に天足彦、胞場姫の二人を造りその性質がどの様なものかを試してみられたとあります。ふたりは物欲を押さえきれず、厳しい命令を破って、神の怒りにふれた。これにより世界には体主霊従の怪しい気が発生し、神人界に邪悪分子の芽が生れるようになったのです。

そこで『神は全智全能でありながら、どうして天足彦、胞場姫の体主霊従の芽を刈りとり、さらに霊主体従に改造して人体の祖としなかつたのか。なぜ体主霊従の祖を放任し、それによって邪悪の世界をつくりみづからその処置に苦しむのか。これでは神の存在と、神力とを疑はざるを得ない』と云う人が居るのは一見もつともな議論であろう。

しかし、神にはわずかな依怙ひいきもなく、誤りだからと言って元に戻すような逆行的神業もしない。一度実

行した神業は一旦弓をはなれた矢が中途に還ってこないように、ふたたびこれを改めるといふことは、天地の成り立ちに反します。だからこれを途中で正すことは出来ないのです。そして一度出た神勅もこれは替えられない。神がそのつど神勅を替える様なことがあるとするなら、宇宙の秩序は全く乱れてしまい、ついには自由気ままな気風が始まってしまいます。それをしないところに神の権威が存在するのです。

時節（物事の移り変わり）には神も叶わないとおっしゃっています。それは国祖御引退の折、邪神に「煎豆に花が咲いたら出てこい」と言われました。これは普通あり得ないことですが、時代を待てば煎った豆にも花が咲く時が来て、三千年の長き世を忍んでこられた国祖も世に出て働く時が来たのです。即ち天運が巡りその時が来たのです。時節とは斯くも有難く、且つまた恐いものです。

（神は初めに宇宙を陰陽二元の相反する要素をもって創られました。陽は霊で善で、陰は体で悪です。世界は善だけでは成り立たず悪だけでも成り立ちません。陰陽の相反する二元より宇宙に力が生まれこの世が誕生したのです。そして、霊体の発達過程で現在は遅れていた体（物質）も完成に近づきました。そしてこれからはミロクの世を迎え、この陰陽のどちらにも偏らず霊主体従の塩梅良い時代が来ます）

六、

この宇宙は天地創造の始めより五十六億七千万年の時を経ています。いよいよ時節が来て<sup>みろく</sup>彌勒出現の時代となりました。彌勒の神が天よりお下りになって、神界、幽界、現界、三界の大改革を成し遂げ、ミロクの世を実現するため、出口聖師を下し、悟りの道を教え諭されたのです。それは善を勧め、悪を懲し、至仁至愛の教を広め、世界を平和に治めるための天則を示し、善政を天地（顕幽神三界）に拡大なさる時期が近づいてきたのです。

『神は万物普通の聖霊にして、人は天地経綸の司宰なり』

前章「一霊四魂（20P）」のところでも書いたように、宇宙に存在する総ての物は神の分け霊で、普遍的に内在する聖霊です。また、現界では人は、この宇宙を治め、運営していくための重要な役割を担った責任ある存在です（神の代理者）。此れまでに千万億年の歳月を経て来ました。そしてミロクの世の実現は目の前に来ておりその神業に参加できるということは、誰も過去に経験した事がなく、また未来にも経験出来ない、今という時代を於いてはないのです。人々がこれまでに経験したことの無い聖世へと移り変わる過渡期に生れて、神業に奉仕することが出来るならこんな幸が何処にあるでしょうか。

神示には、

この日本は<sup>ことたま</sup>言霊（言葉）の幸はう国、言霊の光り輝く国、言霊の生かされる国、言霊の助ける国、そして神によって造られた国である。神徳の充ちている国に生を<sup>う</sup>稟けた神国の人としては尚更である。神の恩は高く、そして深い事に感謝し、その上で国祖の広い御心に報いなければならないのである。

（ミロクの世はもう目の前に来ています。来たという人も居ます。ミロクの大神がこの世に降れて、そのお手伝いが出来るとしたらこれに勝る喜びはありません。消極的に待つのではなく、積極的に自己を磨くことに専念し神業に参加出来る魂に磨き上げたいものです）

## 用語の解説

### ① 『私が』（自分が）

霊界物語の口述者出口玉仁三郎を信者の間では「聖師さま」と呼びます。聖師は明治四年旧七月一二日、現在の京都府亀岡市曾我部町<sup>あな</sup>穴太に生まれました。丹波はこの地方の国名です。現在この生誕地を瑞泉郷と呼び、大本の霊場です。

明治三一年旧暦二月九日、（聖師二七才）に神使（富士山の神霊、木花咲耶姫の天使である松岡<sup>ふもと</sup>芙蓉仙人）に導かれ高熊山（地図上では亀岡市郊外の丁塚山 357m）で飲まず食わずの1週間の霊的修行を命じられます。そこで現代で言う超能力である<sup>てんがんつう</sup>天眼通、<sup>てんじつう</sup>天耳通、《この2つはすでに十歳で神より許された》<sup>じつしんつう</sup>自他神通（相対する人を覚らしめる能力）、<sup>てんげんつう</sup>天言通、<sup>しやくめいづう</sup>宿命通を心得たとあります。心得（こころえ）は根本より、身につけること。悟ることを意味します。

② 『千変万化の波瀾』

この後の章で比喩的に出てくるが旧役員の反抗〔命の危険にさらされた事もあった〕、信者の離反、親族、知友の総攻撃〔第16章にあるようなこと〕など聖師自身への迫害や教団に対する国家権力の誤解（第一次大本事件）、宗教家の迫害、新聞雑誌、単行本の非情な嘲笑〔第13巻「信天翁(三)」や第14巻「信天翁(四)」にあるような綾部新聞の記事等〕など大本に対する迫害もあり、実に文章や、言葉で言い表わせるものではなかったようです。

第14巻「信天翁（四）」

…… イカサマ新聞紙が現はれた 彼の記述に面白い 一丁許り遠くから 見え分くる様な大字にて 書いた原稿二十二巻 二万六千七百枚と 自称して居る云々と  
 能くも馬鹿気た言をいふ ソンナ原稿が世界中 探しても有らう筈が無い 馬鹿を尽くすも  
 程がある いかにも新聞紙の責任を 知らぬ記者だと飯田とて コリヤ又ゑらい脱線だ  
 時候の勢で逆上せたか 無責任にも程がある 余りの事で呆れ果て 言葉も出ない次第なり  
 り それのみならず瑞月が 一身上に相関し 捏造記事を満載し 中傷悪罵のありた  
 けを 尽して快哉叫ぶとは 非人道にも程がある …… 注：一丁=1  
 0.9メートル

③ 『竜宮館』

「竜宮館」は大本発祥の地である綾部の裏町。現大本総本部を指します。大本には聖地が二つ在り、一つはこの綾部で祭祀を中心として行われ、もう一つは亀岡で教えを中心として行われます。その他に聖師が定められた別院と称する聖地が全国に？ヶ所ある。現在は大本は宗教法人大本、大本信徒連合会、愛善苑の三派に分かれています。

④ 『変性男子』の神系と、『変性女子』との二大系統

大本の教ではこの世界は陰陽二元によって成り立っていると示されています。陰と陽はまた霊と体、天と地、巖と瑞、善と悪、経と緯等の相反する二元を意味します。変性男子の神系と、変性女子の神系とはこの二元を代表する神の系譜です。

霊系 陽=霊、天、善、経、巖（変性男子=開祖 出口直） 火  
 体系 陰=体、地、悪、緯、瑞（変性女子=聖師 出口王仁三郎） 水

真神はその働きを霊と体に分けられ霊系の祖神を高皇産霊神、体系の祖神を神皇産霊神といます。陰陽(霊体)二元の相反する働きが作用する事で真神の働きで有る「力」が生まれます。従ってこの霊、力、体の三元を総称して真神と云い天之御中主神と申しあげ、また大国常立大神と申し上げます。

〔霊〕 高皇産霊神 …… 霊的働きの祖神

〔力〕 天之御中主神 …… 霊と体の相反する二元の作用により生まれる力。宇宙根元の神。大原霊神

〔体〕 神皇産霊神 …… 体的働きの祖神

霊力体の働きが活発となり更に分かれて八力が生まれる。この八力の働きにより宇宙の組織が完成します。

動 解 引 合  
 静 凝 弛 分

本来「力」は霊五 体五《善五悪五》で、どちらに偏っても正常な力の働きが生まれません。

参考： 玉鏡 593「変性男子、変性女子」

仏教では女人の身をもつては成仏は出来ぬと云ふので、変性男子として魂を男にして極楽に救つてやると云つてゐる。又変性女子と云ふのは男を女の魂にするので、仏教で云へば大層悪いことになる。大本では、変性男子



と云ふのは女体男霊のことであり、変性女子と云ふのは男体女霊のことである。かかる人は一般にもある。その中特に代表して開祖を変性男子、厳の御魂と云ひ、王仁を変性女子、瑞の御魂と云つてある。

王仁は男で性が女であるが、髪の色が濃く長く多く、髭が少なく、身体が柔かで乳房が大きいところなど、肉々までが女に似てゐる。変性男子は心の中は優しいが、外面は恐いのであり、変性女子はこれに反して、表面は優しいが内心は厳格である。人を懐かしめ又大きい仕事をするのには男体女霊でなくては出来ない。変性男子を厳の御魂と云ひ、変性女子を瑞の御魂と云ふが、瑞の御魂といふのは三五の魂といふことである。つまり伊都能売の魂と云ふのと同じ。能売と云ふのはノは水、メは女の意である。

⑤ 『変性男子は神政出現の予言、警告を發し、千辛万苦、神示を傳達し』

変性男子である開祖に国祖常立尊が神憑りされ、神による政治が行われること（ミロクの世界）を預言し、そこに至る道が大変厳しく試練に満ちたものであることを警告します。

神の目標とされるミロクの世界は理想世界です。待ちに待った時節が来て国祖の御再現によってその理想世界がこの三千世界に実現します《預言》。しかし、現状の世界を見ると、政治、経済、思想に、その他社会全般に渡って「われよし、つよいものがち」の社会です。この状況を改めるには神を唯一の心とし、行いを改めなければ《改心》理想社会を実現することは出来ません。従つて、理想社会を迎えるにはその経過において、神も人もどうしても越えなければならない危機が訪れます《警告》。

ここに聖書のヨハネとキリストの関係が書かれていますが開祖と聖師の関係はまさにヨハネとキリストの関係と同じであり、明治25年の開教から開祖が聖師に会われる明治32年までに7年間が経っています。

聖師はキリスト(救世主)の再生であり、ヨハネ(神政開祖)は救世主の出現とミロクの世界が来る預言と警告を叫ばれたのです。

「水をもつて身魂の洗礼を施し」は ⑩変性女子の参考文章【水火訓】P36を参照、

⑥ 『変性男子の肉体（宮）は女体男霊にして』

一般に仏教用語の「へんじょうなんし」は変成男子と書き、意味も「古来、女子（女性）は成仏することが非常に難しいとされ、いったん男子（男性）に成る（生まれ変わる）ことで、成仏することができるようになった思想です。法華経提婆達多品で、8歳の竜女が成仏する場面を由来とする」（ウィキペディア）しかし、大本では変性男子と書き女性の肉体に男性の霊が宿ることを指します。従つて変性女子は男性の肉体に女性の霊が宿ることを意味します。神諭には変生男子、変生女子と書かれたところもあります。

開祖は陽であり厳の御魂の働きをされ、聖師は陰であり瑞の御魂の働きをされます。

変性男子は 出口なお 開祖 厳の御魂 明治25年・五七才で神業に参加

変性女子は 出口王仁三郎聖師 瑞の御魂 明治31年・二七才で神業に参加

開祖の「厳」また聖師の「瑞」とはどう言う意味かと言えば、

「そして此大神様《天之御中主神大神》は厳 霊と申し奉る。厳と云ふ意義は至厳至貴至尊にして過去、現在、未来に一貫し、無限絶対無始無終に坐す神の意義である。さうして愛と信との源泉と現れます至聖至高の御神格である。さうして或時には瑞 霊と現はれ現界、幽界《中有界、地獄界》、神界の三方面に出没して一切万有に永遠の生命を与へ歓喜悦楽を下し給ふ神様である。瑞と云ふ意義は水々しと云ふ事であつて至善至美至愛至真に坐し且円満具足の大神と云ふ事になる。又霊力体の三大元に関聯《関連》して守護し給ふ故に三の御魂と稱へ奉り、或は現界、幽界、神界の三界を守り給ふが故に三の御魂とも稱へ奉るのである。」【48/12 西王母】以上から天之御中主神大神様の霊的方面と体的方面の働きであることがわかります。

⑦-1 『厳の御魂』 ⑦-2 『瑞の御魂』

\*厳の御魂 日の大神、瑞の御魂 月の大神は、主の神即ち大国常立大神の神霊の御顯現にして、高天原の天国にては日の大神と顯はれ給ひ、高天原の靈国にては月の大神と顯はれ給ふ。【第六三巻第4章 山上訓】

\*天のミロクは瑞霊であり、地のミロクは嚴霊であり、人のミロクは伊都能売の霊であり【水鏡 133「王ミロク様」】

\*本文〔変性男子《開祖》の肉体は女体男霊で、五十七才の時初めて良の金神国常立尊が神憑りされ、嚴の御魂の神業に参加なされた。それは明治二十五年の正月元旦で、同四十五年の正月元旦までの二十年の間、体的洗礼によって、我々の住む現世の汚濁する霊体両系の総てに洗礼を施し、世界改造の神策をはっきりと示された。それが大本神諭である。第一次世界大戦などは嚴の御魂のお働きの一部で、三千世界への一つの大きな警告であったとある。

一方、変性女子《聖師》の肉体は瑞の御魂の神業に参加し、世界の万民に靈的洗礼を施すのが神務である。明治三十一年の旧二月九日から神業に参加し、大正七年二月九日までの満二十年間の間に靈的の神業をほとんど完了した。物質万能主義や神の存在を完全に忘れた、体主霊従の考え方がはびこる現代も、少しは目覚め、神の実在を認識する人々も、日に月に多くなって来たのは、すなはち神霊の偉大な働きの結果で、決して人の知恵や力ではない]

\*第 47 卷 総説に以下のように示されています。（抜粋）

最上天界即ち高天原には、宇宙の造物主なる大国常立 大神が天地万有一切の総統権を具足して神臨し給ふのであります。そして大国常立大神の御名を天之御中主 大神と称へ奉り、無限絶対の神格を持し、靈力体の大原霊と現はれ給ふのであります。この大神の御神徳の完全に発揮されたのを天照 皇大神と称へ奉るのであります。そして霊の元 祖たる高皇産霊大神は、一名神伊邪那岐大神又の名は日の大神と称へ奉り、体の元 祖 神皇産霊大神は一名神伊邪那美大神又の名は月の大神と称へ奉るのは、此物語にて屢述べられてある通りであります。又高皇産霊大神は靈系にして嚴の御魂国常立大神と現はれ給ひ、体系の祖神なる神皇産霊大神は、瑞の御魂豊雲野大神又の名は豊国主 大神と現はれ給うたのであります。この嚴の御魂は再び天照大神と顕現し給ひて天界の主宰神とならせ給ひました。因に天照皇大神様と天照大神様とは、その位置に於て神格に於て所主の御神業に於て大変な差等のある事を考へねばなりませぬ。P4 又瑞の御魂は神素盞鳴大神と顕はれ給ひ、大海原の国を統御遊ばす神代からの御神誓である事は神典古事記、日本書紀等によつて明白なる事実であります。然るに神界にては一切を挙げて一神の御管 掌に帰し給ひ宇宙の祖神大六合常立 大神に絶対的の神権を御集めになつたのであります。故に大六合常立大神は独一眞神にして宇宙一切を主管し給ひ嚴の御魂の大神と顕現し給ひました。扱て嚴の御魂に属する一切の物は悉皆瑞の御魂に属せしめ給うたのでありますから、瑞の御魂は即ち嚴の御魂同体神と云ふ事になるのであります。故に嚴の御魂を太元神と称へ奉り、瑞の御魂を救世神又は救 神と称へ又は主の神と単称するのであります。故に此物語に於て主の神とあるは、神素盞鳴大神様の事でありませぬ。主の神は宇宙一切の事物を済度すべく天地間を昇降遊ばして其御魂を分け、或は釈迦と現はれ、或はキリストとなり、マホメットと化り、其他種々雑多に神身を変じ給ひて天地神人の救済に尽させ給ふ仁慈無限の大神であります。而して前に述べた通り宇宙一切の大権は嚴の御魂の大神即ち太元神に属し、この太元神に属せる一切は瑞の御魂に悉皆属されたる以上は神を三分して考へることは出来ませぬ。約り心に三を念じて口に一をいふことはならないのであります。故に神素盞鳴大神は救世神とも云ひ、仁愛大神とも申上げ、撞の大神とも申し上げるのであります。

\*第 48 卷 第 12 章 西王母

高天原の総統神即ち大主宰神は大国常立尊である。又の御名は天之御中主大神と称へ奉り、其靈徳の完全に発揮し給ふ御状態を称して天照皇大神と称へ奉るのである。そして此大神様は嚴霊と申し奉る。嚴と云ふ意義は至嚴至貴至尊にして過去、現在、未来に一貫し、無限絶対無始無終に坐す神の意義である。さうして愛と信との源泉と現れます至聖至高の御神格である。さうして或時には瑞霊と現はれ現界、幽界、神界の三方面に出没して一切万有に永遠の生命を与へ歡喜悦樂を下し給ふ神様である。瑞と云ふ意義は水

々しと云ふ事であつて至善至美至愛至真に坐まし且円満具足の大光明と云ふ事になる。又靈力体の三大元（くわんれん）に關聯して守護し給ふ故に三の御魂と稱へ奉り、或は現界、幽界（地獄界）、神界の三界を守り給ふが故に三の御魂とも稱へ奉るのである。要するに神は宇宙に只一柱坐ますのみなれども、其御神格の情動によつて万神と化現し給ふものである。さうして嚴靈は經の御靈と申し上げ神格の本体とならせ給ひ、瑞靈は実地の活動力に在し御神格の目的即ち用を為し給ふべく現はれ給うたのである。故に言靈学上之を豊国主尊（とくにぬしのみこと ままき たてまつ）と申し奉り又神素盞鳴尊（かむすきのぬのみこと となまつ）とも稱へ奉るのである。さうして嚴靈は高天原の太陽と現はれ給ひ、瑞靈は高天原の月と現はれ給ふ。故にミロクの大神を月の大神と申上ぐるのである。 【48/12 西王母】

真神（大原靈）天之御中主大神は高天原では総統神即ち大主宰神として大国常立尊（力）と現れ給う。そしてその働きを二分に別けられ、靈系の働きを幽の幽では高皇産靈大神（たかみむすびの）（靈の元祖）と申し上げ、幽の頭では神伊邪那岐大神又の名は日の大神と稱へ奉ります。体系の働きを幽の幽では神皇産靈大神（かむみ むすびの）（体の元祖）と申し上げ、幽の頭では神伊邪那美大神又の名は月の大神と稱へ奉るのです。即ち、靈、力、体の三つの働きを分担されます。そしてまた靈系の働きを嚴の御靈魂と申し上げ、体系の働きを瑞の御魂と申し上げます。

◇大国常立大神＝天之御中主大神〔この大神の御神徳の完全に發揮された状態を天照皇大御神〕

◇靈系 高皇産靈大神 神伊邪那岐大神 日の大神 嚴の御魂・国常立大神・天照大神

◇体系 神皇産靈大神 神伊邪那美大神 月の大神 瑞の御魂・豊雲野大神（豊国主大神）・神素盞鳴大神  
嚴の御魂 太元神 瑞の御魂 救世神

主の神とあるは、神素盞鳴大神様（瑞の御魂）の事であり、宇宙一切の事物を濟度すべく天地間を昇降遊ばして其御魂を分け、釈迦、基督、マホメット等と現はれ、其他種々雑多に神身を変じ給ひて天地神人の救済に尽させ給ふ仁慈無限の大神であります。宇宙一切の大権は嚴の御魂の大神に属し、太元神に属する一切は瑞の御魂に属します。したがって嚴の御魂の大神と瑞の御魂の大神は同体神です。故に神素盞鳴大神は救世神とも云ひ、仁愛大神とも申し上げ、撞の大神とも申し上げます

\*大地は体を主とし、靈を従として形成られあり。故に木火土金水が凝結して生成化育を営みつつあるなり。太陽の靈魂を嚴の身魂と稱するに對し、地の靈を瑞の身魂といひ、体主靈従の身魂といふ。また大地球の直靈を大曲津日の神といひ、荒魂、和魂、幸魂、奇魂の四魂を備へ、その四魂は太陽のごとく分離してまた直靈を備ふ。その直靈を八十曲津日の神といふ。この四魂はまた更に分れ、際限無く大地一面に一靈四魂を分布されつつあるなり。 【6/26 体五靈五】

### ⑧ 『かの欧州大戦乱《第一次世界大戦》のごときは』

「かの欧州大戦乱のごときは、嚴の御魂の神業発動の一端にして、三千世界の一大警告であつたと思ふ」  
欧州大戦乱は第一次世界大戦(1914・大3年)で当時、世界の覇権を握っていた為政者に取り憑いていた八頭八尾の大蛇・邪神の計画を挫くものであったと思います。

参 考： 大本神論（明治36年旧7月13日）の抜粹です。

「露国から始まりて《日露戦争：1904明37年》、大戦争《第一次世界大戦》が在ると申してあるが、彼方には深い大きな計画をいたして居るなれど、上から一寸も見えん、良の金神の日本には経綸がいたして在るぞよ。（日露戦争の勝利）・・・是から段々と世が迫りて来て、世界中の大戦争《第二次世界大戦》となりて、トコトンまで行くと、向こうの国が一つになりて、皆攻めてきた折には、・・・、外国の侵略主義はモウ世が終結ぞよ。何程日本の人民が智慧学力が在りても、兵隊が何程沢山ありても、今度は人民同士の戦争でありたら、到底叶はんなれど三千年余りての経綸の時節が来たので在るから、世界中から攻めてきて、日本には敵はん仕組が為であるなれど、・・・」

第15巻第11章 「大蛇退治の段」には

「そこで其形は如何さまにかと、問ひたまへばと云ふ意義は、八岐の遠呂智なす悪思想の影響は如何な

る状態に形はれ居るやとの須佐之男命の御尋ねなり。

そこで変性男子の身魂なる老夫と老女は、彼悪神の経綸の事実上に顕現したる大眼目は、赤加賀知なしで身一つに、頭八つ尾八つありと云つて、悪神の本体は一つであるが、その真意を汲んで、世界覆滅《くつがえし滅ぼす》の陰謀に参加して居るものは、八人の頭株であつて、此の八つの頭株は、全地球の何処にも大々的に計画を進めてをるのである。政治に、経済に、教育に、宗教に、実業に、思想上に、他の社会的事業に対して陰密《密かに》の間に、一切の破壊を企てて居るのである。就ては、尾の位地にある、悪神の無数の配下等が、各方面に盲動して知らず識らずに、一人の頭目と、八つの頭の世界的大陰謀に参加し、終には既往《過去の》五年に亘つた世界の大戦争などを惹起《引起こす》せしめ、清露《清は中国、露はロシア》其他の主権者を亡ぼし、労働者を煽動して、所在世界の各方面に、大惑乱《まどわしみだす》を起しつつあるのである。赤加賀知とは砲煙弾雨、血河死山の惨状や、赤化運動の実現である。実に現代は八岐の大蛇が、いよいよ赤加賀知の大眼玉をムキ出した所であり、既に世界中の七【オトメ】を喫ひ《喰い》殺し、今や最後に肥の河なる、日本までも現界幽界一時に喫はむとしつつある処である。要するに八つ頭とは、英とか、米とか、露とか、仏とか、独とか、伊とかの強国に潜伏せる、現代的な勢力の有る、巨魁《首領》の意味であり、八つ尾とは、頭に盲従せる数多の部下の意である。頭も尾も寸断せなくては成らぬ時機となりつつあるなり。」とあります。

### ⑨ 『三千世界』

三千世界とは現界、幽界、神界を指し現界は我々の住む世界、幽界は死後の世界、神界は神々の世界である。また別の意味として過去、現在、未来をも指す。

### ⑩ 『変性女子』

変性女子である出口聖師は瑞の御魂の神業に参加されたのは明治 31 年旧暦 2 月 9 日で高熊山の一週間の靈的修行を終えられてからである。「火をもって世界万民に洗礼を施す」とは、大本の教えでは「火」は霊であり靈的即ち魂への洗礼である。聖師の神業は明治 31 年から大正 7 年までの 20 年間で靈的神業を終えられたことになる。その結果「物質万能主義、無神無靈魂説に、心酔累惑せる体主靈従の現代も、やや覚醒の域に達し、神霊の实在を認識するもの、日に月に多きを加へきたれるは、すなはち神霊の偉大なる神機発動の結果にして、決して人智人力の致すところではないと思ふ。」とあり、西洋思想の物質万能主義や仏教思想にどっぷりつかっていた人々の間にも本当の意味での神霊の实在を認め始めたのである。それは人の力では図り知ることの出来ない神業である。

体主靈従は「序」靈主体従を参照されたい。

《洗礼：（バプテスマ、キリスト教で信者となるための儀式。全身を水中に浸し、または頭上に水をそそぐことによつて、）原罪を洗い浄め新たな生命によみがえることを象徴する》

### 参 考

開祖の水洗礼について、靈界物語入蒙記第一章「水火訓」に以下のように載っている。

国照姫《開祖》は国祖大神の勅を受け、水を以て所在天下の蒼生《人》にバプテスマ《洗礼》を施さむと、明治の二十五年より、神定の靈地綾部の里に於て、人間界の誤れる行為を矯正し、地上天国を建設すべく、其先駆として昼夜間断なく、營々孜々《盛んにつとめ励む》として、神教を伝達された。水を以て洗礼を施すといふは、決して朝夕清水を頭上よりあびる計りを云ふのではない。……

神界に於ては先づ天界の基礎たる現実界に向つて、改造の叫びをあげられたのである。国常立尊の大神靈は精靈界にまします稚姫君命の精靈に御靈を充たし、予言者国照姫の肉体に來らしめ、所謂大神は間接内流の法式に依つて、過去現在未来の有様を概括的《要点をまとめること》に伝達せしめ玉ふたのが、一万巻の筆先となつて現はれたのである。此神諭は自然界に対し、先づ第一人間の言語動作を改めしめ、而して後深遠微妙なる真理を万民に伝へむが為の準備をなさしめられたのである。凡て現世界の肉体人を教へ

導き、安逸《安んじて楽しむ》なる生活を送らしめ、風水火の災ひも饑餓戦の憂もなき様、所謂黄金世界を建造せむとするの神業を称して水洗礼といふのである。……

国照姫の命のみならず、今日迄世の中に現はれたる救世主又は予言者などは、何れも自然界を主となし、霊界を従として、地上の人間に天界の教の一部を伝達してゐたのである。釈迦、キリスト、マホメット、孔子、孟子其他世界の所在先哲も、皆神界の命をうけて地上に現はれた者であるが、霊界の真相は何時とも説いてゐない。……神は時代相応、必要に仍つて、教を伝達されるのであるから、未だキリストに対して、天国の真相を伝えられなかつたのである。又其必要を認めなかつたのである。然るに今日は人智漸く進み、物質的科學は殆ど終點に達し、人心益々不安に陥り、宇宙の神靈を認めない者、又は神靈の有無を疑ふ者、及無神論さへも稱ふる様になつて来た。かかる精神界の混乱時代に対し、水洗礼たる今迄の予言者や救世主の教理を以ては、到底成神成仏の域に達し、安心立命を心から得ることが出来なくなつたのである。故に神は現幽相応の理に仍つて、火の洗礼たる霊界の消息を最も適確に如実に顕彰《明らかにあらわす》して、世界人類を覚醒せしむる必要に迫られたので、言霊別の精靈を地上の予言者の体に降されたのである。……

キリストはヨハネより水の洗礼を受け、之より進んで天下に向つて火の洗礼を施すべく準備してゐた時、天意に依つて、火の洗礼を施すに至らず、遂に十字架上の露と消えて了つたのである。……故に彼は再び地上に再臨して火の洗礼を施すべく誓つて昇天したのである。……

火の洗礼は霊主体従的神業であつて、霊界を主となし、現界を従となしたる教理であり、水の洗礼は体主靈従といつて、現界人の行為を主とし、死後の霊界を従となして説き初めた教です。【入蒙記/1「水火訓」】

#### まとめ

水洗礼は体的洗礼で現界の事についての洗礼(教え)である。過去の預言者(宗教家)は現世の行い(「現世界の肉体人を教へ導き、安逸なる生活を送らしめ」るため)を教へてきた。それは自然界を主とし、霊界を従とした教へでキリスト、孔子、マホメット皆そうであり、釈迦のみが多少霊界の事を説いています。今日の精神世界の混乱は甚だしく、今までの水洗礼では人々を救う事が出来なくなつてきた。又時代は体の發達を待っていたがいよいよその時機が来て、霊主体従の社会へと移行する(ミロクの世界を迎える)最終段階に来たのです。

そこで「神は時代相応、必要に仍つて、教を伝達され」る必要を感じ、また、現幽相応の理《つりあうと言う真理》によって霊界の消息(火の洗礼)を示されたのです。ここに火の洗礼を施された。即ち霊界物語によって霊界の状況は初めて詳しく説かれたのです。従つて聖師の教へを火の洗礼というのです。

#### ⑪ 『変性男子』

変性男子は出口なお開祖であり肉体(肉宮)は明治25年より昇天される大正7年まで、神政を開かれる神業に入られて二七年間を費やされた。その間お筆先を書き続けられ半紙一万巻と言われています。そして死後霊界に入られてもその神業は継続されている。霊体両界とは霊界と現界の両方を指す。(参考:【15/11】に「二靈一体なる神政開祖の神人」とある)

ヨハネは前述ではカタカナ表記であつたが、ここでは神政開祖と漢字で書いてヨハネと振り仮名されている。また第24章では、章題では神政開基《物事のもとを開く》、本文では神政發揚直《神による政を直ちに振るい興す?》と書いて「ヨハ子」と振られている。なぜ「ネ」が「子」になっているのか不明だが神政發揚直で直子、開祖即ち国常立尊を指すのではないか。神政の時代へ振るい興させるのは国常立尊の神業である。

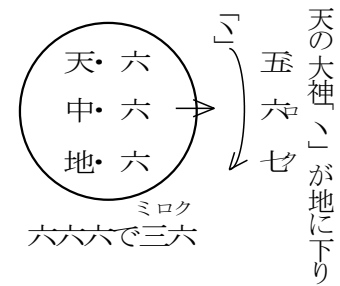
変性男子=巖の御魂・・・水(体的)洗礼(霊体両系の総てに洗礼を施し)

変性女子=瑞の御魂・・・火(靈的)によって世界万民に洗礼を施す

#### ⑫ 『変性女子は三十年間の神業に奉仕して』

変性女子は出口王仁三郎であり「三十年間の神業に奉仕して」とは明治31年3月(旧曆2月9日)より昭和3年の3月3日(旧曆2月9日)迄の三〇年間を指します。

霊 体  
 火 水  
 火は5つ 水は6つ



⑬ 『五六七神政の成就』

参 考： 五六七とは

天と地が未だ別れぬ時代、宇宙は全体が泥海であって、おぼろ月夜よりも

さらに暗い中に神々様は住んで居られ何の楽しみも無い世界でした。御精神のよい神様（ツキの大神様）は皆が楽しく暮らせる世界にしたいと思われます。そこで神様の御神力で天地が剖判（分かれる）します。天には日月星辰が生まれ、地には山野ができ植物が生え、人間や禽獣虫魚が発生します。初めは理想世界でしたが次第に天地が発展進歩するにつれ、陰陽二元から出る<sup>かす</sup>滓が人身を悪化させ悪が天地に充満して行きます。

当初此の世を治めておられた国常立命尊（国祖）も、ついには悪の勢いに勝てず、世界の東北（日本）に御引退になられます。

国祖は明治25年に再び御復権になられたことを宣言し、御引退時のお約束により天の御三体の大神様が地に下られてお手伝いなさる世か来たのです。

天地が分かれる前は天も地も中間も水（六）で、<sup>みろく</sup>六六六でしたが、天の神様が地に下られて<sup>天 中間 地</sup>五 六 七のミロク（弥勒）となられます。

仏教で言う弥勒は釈迦入滅後、五六億七千万年の後、仏教が廃れ此の世が乱れた時、弥勒菩薩が現れ人々を救うと言う意味です。

⑭ 『<sup>たてかえりたてなお</sup>立替立直』

大本神諭の言葉で大本を特徴付ける重要な言葉です。現代風に云えば Scrap and build（スクラップアンドビルド）で、家を壊して新しい家に建て直すように、現状の腐りきった世界を一旦は<sup>きらつ</sup>更新にし新しい世界に立直すことです。

⑮ 『主として水洗礼の霊体両系の改造が三十年であつて、これはヨハネの奉仕すべき神業であり、体霊洗礼の霊魂的改造が前後三十年を要するといふ神示である』

この部分、現在の私には意味を理解できない

⑯ 『<sup>ていけん しきい</sup>天地経綸の司宰たるべき奉仕者』

天地経綸の司宰者とは一般には我々人のことであるが、ここでは我々凡夫ではなく開祖、聖師を指します。天地経綸の司宰とは大本教旨の一部です。

全文『神は万物普遍の霊にして、人は天地経綸の司宰なり、神人合一してここに無限の権力を発揮す』  
 前述したようにこの宇宙は陰陽の二元より成り立っています。陽は霊であり、陰は体です。陰陽または霊体二元が合体してここに無限の力が生み出されます。（神はその霊を形有る総ての物に分け与えられました。即ち神の霊は万物に普遍的に内在するものです。体（物質）を代表する人（<sup>ひと</sup>霊止）は万物の霊長です。霊のみにても、体のみのでもその働きは出来ません。）現世では形あるもの全てに神霊の断片が宿っています。人はそのうちの最も大きな存在です。神の働きを最大限に発揮するには神（霊）と人（体）とが神人（霊体）合一してこそ実現するのです。

大本教団では以下のように示しています。

大本は、神について、人について、神と人との関係について示した聖言を教旨としています。

人は、神の御心を腹の底から理解し、神の御力を受け、神と人が一体となって人類の理想の世界を築いていくことをうたっています。

「神は万物普遍の霊」とは、神はこの世一切を創造されたご存在であり、この世一切のものには神の普遍的な霊が宿っているということです。

天地経綸の天とは、地上に対する宇宙であり、現実世界に対する霊の世界をも意味します。

ここでいう天地とは、霊界・現界を合わせた全宇宙を指します。経綸とは、整え治めることです。私たち人間は神の代行者として、神の願われる理想世界の実現に向けて、宇宙全体を整え治めるために構想し、実践していく責任者です。

人間は神が創造されたすべてのものの霊長であり、神の願われる理想世界を実践していくために、神から絶大な知恵と力を授けられているのです。

人はこのような雄大な使命を頂いていますが、その使命を果たすには、神人合一することが絶対の条件です。神の心を心とし、神の力を身に受けてこそ、この使命を遂行し、限りない権威と力徳を発揮することができるのです。

#### ⑰ 『天地の元の先祖の神』

此の世にただ一柱おられる、此の世の創り主であり真神である、天之御中主神のことです。

#### ⑱ 『ミタマといへば』

『御神諭に身魂たてかたてなほしの樹替樹直みといふことが書いてある。ミタマと言うのは、靈魂の事だけだと思っている人が沢山にいる。身みは身体、または物質界を指し、魂たまとは靈魂、心性（心の本来の姿）、神界等を示すのである。』とあるので注意して読んでください。

物語の中に「みたま」という言葉が多く出てきます。漢字で書くと霊、魂、靈魂、身魂とありそれぞれに意味が違います。これから読み進めていく場合に注意して下さい。また、

「身の方面、物質的現界の改造を断行されるのは国祖くにす大国常立神おほくにとこたちのかみであり、精神界、神靈界しんれいの改造を断行したまふのは、豊国主神とよくにぬしのかみの神権である。ゆゑに宇宙一切は霊界が主であり、現界が従であるから、これを称して靈主体れいしゅたい従じゅうといふのである」は重要で大本の勉強をする場合、此の二神の名前及び「靈主体従」という言葉に注目していただきたい。

#### ⑲ 『靈主体従』

大本教義の根幹をなす言葉です。霊が主で体が従であると示されています。宇宙は陰陽、霊体二元から成り立ちこの霊体が合一して力が生まれると何度も書きましたが、正しい力が発揮されるには霊五、体五の関係になければなりません。

男女もまたこの霊体の関係と同様です。男女の関係は同権ですが、夫婦の関係は夫倡婦随であると示されています。一家の中に同権の男女が居ては意見がまとまりません。お互いに意見を主張し合ったら船は山に登ります。従って、家庭では妻が一步下がり夫を上手く立てコントロールして行けば家庭は円満に保たれます。宇宙の創造に当たって最初に霊素が生まれ次いで物質の元である元素が生まれました。従って、霊を主とし体を従とすることで円滑に活動し靈主体従となるのです。宇宙は本来、靈的立場から見ると霊五体五で、体的立場から見ると体五霊五です。

#### 第六巻第26章 「体五霊五」に

（附言）「靈五体五（靈主体従）をひのもとの身魂といひ、体五霊五（体主靈従）を又ひのもとの身魂といふ。併し行動上の体主靈従は、之を悪の身魂または智慧の身魂といふなり。また靈主体従とは靈五体五の意味で、体主靈従とは体五霊五の意味なりといふ説明は、組織的の説明にして、行動上の説明にあらず。読者よくよく注意すべし。」 【6/26】 と有ります。現界にあっても行動の上ではあくまでも靈主体従です。

神様は此の世を創られ天地を剖判された時から普あまねく神人が平等で栄え楽しむ社会にする事を望まれました。自己を犠牲にし公共のために尽くす身魂を靈主体従の身魂といい、それに反して己の利益のみに生きるものを自己愛智（ちしき）の身魂と言い体主靈従と言うのです。

日常生活の中で私達は物事を判断する時、顕界に生活している以上どうしても表面に現れてくる事象だけに気を取られ、体的に物事を見、判断しがちです。しかし、その事件の裏にある見えない部分（靈的部分）を忘れて

はなりません。即ち事象に囚われず本質を見落とさないことです。霊主体従は隠れている部分を見つけ出し本質を捉えることが大切です。

特に事件（地震等）などは起きた当座はうろたえて右往左往しますが、しばらく経てば落ち着きます。人の噂や、周囲の慌てた行動（感情）に流されず、神様に祈って冷静になってどう行動すべきかを見極めたいものです

⑩ 『天足彦、胞場姫』

旧約聖書にアダムとイブの話が出てきます。天足彦、胞場姫がそうでエデンの園のリンゴの話と似ています。「これより世界は体主霊従の妖気発生し、神人界に邪悪分子の萌芽を見るにいたった」のです。

天地は陰陽（善悪）二元から出来ています。従って悪は最初から存在し、相反する二つの要素によって力が生れ、世界が創造されたのです。霊主体従（霊五体五）は正しい道と言わなければなりません。

霊界物語第 60 巻第 9 章 「夜光玉」に胞場姫がタクシャカ竜王に憑依され神の教えに背くことが書かれています。

神代の昔高天にて 天地の主と現れませる 大国常立大神は 宇宙万有造りなし 神の  
 形の生宮を 最後に造りなさむとて 天足の彦や胞場姫の 珍の御子をば生みたまふ か  
 かるころへ天界の 海王星より現はれし 汝タクシャカ竜王は 神の御国を汚さむと  
 胞場の身魂に憑依して 神の教に背かしめ 蒼生草を悉く 罪の奴隷と汚したる 悪  
 逆無道を矯めむとて 皇大神の勅もて 月照彦の大神は 汝を此処に封じまし 世の  
 禍を除かれぬ さはさりながらタクシャカの 霊の邪気が世に残り 八岐大蛇や醜狐  
 曲鬼あまた現はれて 神の造りし御国をば 汚し曇らす果敢なさよ 此の世の曲を清めむと  
 巖の御霊の大御神 瑞の御霊の大神は 千座の置戸を負ひたまひ 汝が犯せし罪科を 宥  
 して地上に救ひ上げ 尊き神の御使と なさせたまはむ思召し 汝タクシャカ竜王よ  
 吾が宣り伝ふ言の葉を 心の底より悔悔して 喜び仰ぎ聞くなれば 今こそ汝を救ふべし【60/9  
 夜光玉】

人体の祖である胞場姫（イブ）が神の教えに背き、その後三種の悪神が生まれます。八大竜王の一つであるタクシャカ竜王は月照彦（大八洲彦命）によってアズモス山の地中深く三千年の間、封じ込められます。本来悪神であった竜王が神の許しを得再び地上に出てきて、天地の陽気を調節する役目をします。どんな悪神も改心すれば、許されて神のご用にお仕え出来るようになるのです。

⑪ 『時節には神も叶はぬぞよ』

天地創造では初めに霊素が生まれその年月はおよそ 10 億年を費やします。次いで体素である元素が生まれるまでにまた 10 億年を費やしたと示されています。この宇宙が完成するまでに 5 6 億 7 千万年が必要でありその時期がもう目の前に来ているのです。霊（精神）の発達と体（物質）の発達はそこに時間的差が生じます。この二元が完成した時がミロクの世界です。見方を変えていえば、それは化学反応によって物が出来るように、順序を追って反応が進み時期（時節）が来れば必ず完成するのです。時節とは時間の経過であり、反応の進行状況です。時を待てば反応は進み物は完成します。それが時の力です。反応の進行には神も手の下しようがない、恐ろしくもありまた結構でもある。反応が進行するにつれ灰汁（滓）が出てきます。灰汁は反応を遅らせるので、常に取らなければなりません。灰汁を取る作業が祓戸の神のお働きであり禊ぎです。今は最終段階に進みルツボの表面は灰汁で充たされています。しかし、霊界物語という最終の触媒が投入されたので灰汁の下に隠れている弥勒の世という完成品が間もなく現れてきます。

⑫ 『世に落ちてをりた神も、世に出て働く時節が参りたぞよ』

「世に落ちていた神」とは国祖が御引退になられた時共に根底の国に赴かれた神々を指します。

『節分の夜を期して隠れたまひし、国祖国治立《国常立》の大神以下の神人は、再び時節到来し、煎豆の花の



咲くてふ節分の夜に、地獄の釜の蓋を開けて、再び茲に神国の長閑な御世を建てさせ玉ふ。故に梅の花は節分をもつて花の唇を開くなり。』【6/24 富士鳴戸】

第5巻第26章 「良坤の二壺」に

轟然たる大音響とともに突然爆発したる天教山の頂上より、天に向つて打ち上げられたる数多の星光は、世界の各地にそれぞれ落下した。

これは第四巻に示す地球の中軸なる大火球すなはち根底の国に落ちて、種々の艱難辛苦をなめたる各神の身魂の時を得て、野立彦命《国常立命》の神徳により地中の空洞（天の岩戸）を開き、天教山の噴火口に向つて爆発したのである。俗に地獄の釜の蓋が開くと云ふはこのことである。また『天の岩戸開き』と云ふのも、これらを指して云ふこともあるのである。

地上に散布せられたる星光は、多年の労苦に洗練されて天授の真靈魂に立替はり、ことに美はしき神人として地上に各自身魂相応の神徳を發揮することとなつた、これらの顛末を称して、『三千世界一度に開く梅の花』と謂ひ、また各身魂の美はしき神人と生れて、神業に参加するの状態を指して、『開いて散りて実を結び、スの種子を養ふ』といふのである。

### ② 『天地剖判の始め』

大初、天と地は一体で泥海の状態であつたが四十億年を経て剖判（分かれる）した。

第3巻 第50章「安息日」に以下のように示されている。

大宇宙の太初に當つて、きわめて不完全なる靈素が出現し、それが漸次発達して靈の活用を發生するまでの歲月はほとんど十億年を費している。これを神界においては、ヒツカ（一日）といふ。つぎにその靈の発動力たる靈体（幽体）なるものが宇宙間に出現した。これをチカラと称えた。チとは靈または火の意味であり、カラとは元素の意味である。この宇宙に元素の活用するにいたるまでの歲月は、また十億年を費してゐる。この十億年間を神界においてフツカ（二日）といふ。

つぎにこの元素に靈氣發生して、現頭の物体を形成するにいたるまでの歲月は、又大略十億年を費やしてゐる。この十億年間の靈体の進歩を称して、ミツカ（三日）といふ。ここにいよいよ靈、力、体の三大勢力發揮して、無数の固形体や液体が出現した。太陽、太陰、大地、諸星の發生は、次の十億年間の歲月を費して居る。これを神界にてはヨツカ（四日）といふ。

またつぎの十億年間の歲月を費やしたる神靈の活動状態を、神界にてはイツカ（五日）といふ。イツは稜威にして、カは光輝の意である。この五日の活動力によりて、動植物の種、天地の間に現出した。いよいよ五十億年間の星霜を経て、陰陽、水火の活用あらわれ、宇宙一切の万物に水火の活用が加はり、森羅万象の大根元が確立した。この歲月は六億年を費してゐる。この六億年間の神靈の活用をムユカ（六日）といふ。

【3/50 安息日】

要約すると

宇宙創造の初めの十億年で靈素が出現し、それが漸次発達して靈の活用となつた。【ひつか】

次の十億年を経て元素が創り出され、力が生まれた。【ふつか】

次にまた十億年でこの元素に靈氣が發生して、現頭の物体を形成するようになった。【みつか】

次の十億年で、いよいよ靈、力、体の三大勢力が發揮され、無数の固形体や液体が出現した。【よつか】

そして、天地は剖判し太陽、太陰、大地、諸星の發生を見た。これまでにおよそ、五十億年の歲月を費して居る。

【いつか】

④ 『ためしもなき聖世の過渡時代に生れ出で、神業に奉仕することを得ば、何の幸か之に如かむやである』

天地が剖判して五十六億七千万年後にミロクの世が完成すると示されています。丁度その時が現代です。神様の目から見ればもうそこに来ているのです。しかし、ミロクの世はただ時間を待たばやって来るのではありません

ん。そこには神も人も産みの苦しみがあるのです。人類が生まれてから七千万年がたち、今はミロクの世を迎える御神業に奉仕出来る時代です。そして、この時代に生まれたことは何と幸せな事であろうか、望んでも望めない千載一遇の機会です。

㊤『神は万物普通の霊にして、人は天地経綸の司宰なり』 ㊤を参照

㊤ 『言霊の幸はふ国、言霊の天照る国、言霊の生ける国、言霊の助ける国』

天地万有は言霊（声音）によって創られたと示されています。したがて言霊はあらゆる物の根元です。では言霊はどうして創られたのでしょうか。

天祥地瑞によれば、天もなく地もなく宇宙もなく、大虚空中に一点の、忽然と顕れ給ふ。この、たるや、すみきり澄みきらひつつ、次第々々に拡大して、一種の円形をなし、円形よりは湯気よりも煙よりも霧よりも微細なる神明の気放射して、円形の圏を描き、を包み、初めての言霊生れ出でたり。此の口の言霊こそ宇宙万有の大根元にして、主の大神の根元太極元となり、皇神国の大本となり給ふ。



【73/6 言幸比女の神】

大本賛美歌第16-2に以下のように示されている。

世界の太初に言葉あり	言葉は道なり神にます
すべてのものは言霊の	清き御火水にもとづき

て

造られ出でしものぞかし	現しきこの世は言霊の
さちはひ助け生ける国	天照りわたる貴の国
すべての法規も更生も	言葉を放れてほかにな

し

ああかむながら言霊の	幸ひ助くる神の国に
生まれ出でたるうれしさよ	

【61/42】

「初めに言<sup>ことば</sup>があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。言の内に命があった。命は人間を照らす 光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。」

以上からも日本は言<sup>ことたま</sup>霊の幸はう国、言霊の光り輝く国、言霊の生かされる国、言霊の助ける国なのです。

参 考

水鏡 075「若返りと言霊」

私の言霊によつて年を若くして貰つた人達は、其通りに信じ、其通りに行ひ、其通り【云】はねばならぬ。人が笑はうが譏<sup>あざわら</sup>ろうが構はぬ。其通り人にも云ふがよい、それが出来ねば折角若くして貰つても若くなり得ない。六十才の人が二十才引いて四十にして貰つたら、誰に向つても四十であると【明言】し、又自分自身も深く信じ、さういふ若々しい気持になつて活動したらよい、きつと年齢通若くなるのである。

【言<sup>ことたま</sup>霊】が大事なのである。

